友達が海皇の依代だったんだが

歌詠

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

海皇の依代に選ばれた少年と、エルキドゥの身体を与えられた男の話。

２０２０／０４／２４追加）こちらの作品はピクシブにも掲載されております。

目次

それぞれが選んだ道 ―― 1
想うが故に、擦れ違う ―― 24
守りたい人のために ―― 46
立ち塞がる者 ―― 58
譲れない想い ―― 69
正義のカタチ ―― 89
星光の岬 ―― 105

それぞれが選んだ道

貴方は神を信じますか？

・・・などと、開口一番に言われると「あっこの人関わっちゃ駄目なタイプの人間だな」

と、結論を出して距離を置く人間が多いであろう今日この頃。

だが、あえて言わせて貰おう。

神は存在している

しかし、その在り方が人間の理想に即するものなのかと問われると、

ＮＯだ

全く以てノー。

いや、もしかしたら、神の中には人間の理想を具現化する、夢のような存在もいるかもだけど

それは今は関係ないか。

前置きが長くなった。
今の状況を一言で表そう。
俺は転生した
流行語にしてもいいんじゃないかってぐらい、昨今では人気の言葉なわけだけど
だからといってそれを現実にしてしまうのは、ナンセンスだとは思わなかったのだろうか。
別に人生に絶望しているわけでも、憂いた日常を謳歌していたわけでもない。
日本という名前の先進国で想定される、ごくごく普通の人の生を送っていたはずなのに。
俺は突如として命を落とすことになった。
落雷に貫き焼かれるという、なかなかレアな死に方で。
焼き加減もレアだったら命を落とすこともなかっただろうに。
いや、冗談じゃなく、本気でさ。
そんなこんなで、俺は一度死んだんだ。
そして、目が覚めたら白くて清潔なベッドに寝かされていた。
え？
肝心の神には会わなかったのかって？

うん、会わなかったかな。
神ね、あれは俺に思念を飛ばすだけ飛ばしてどっかに消えていった。
内容はコレだ。
『拝啓、雷にあたった哀れな人の子さん
お元気ではないでしょうが、私は元気です、やったね。
人の命は儚く、その灯火がいつ消えてしまうのかは、個体によって異なります。
仕方が無いことだと諦めてください。
貴方は死にました。
ですが、今回の落雷は、神々の下らない諍いによって及ぼされた事象。
人の生き死にをいちいち気にするなと言う神が大概ですが、
天災を起こした者達の争いが馬鹿馬鹿しすぎて、今回ばかりは流石に、目に余りました。
故にこそ、貴方に機会と新たな身体を与えます。
貴方の意志は問いませんが、望まぬのなら、その身体の自爆機能でもって死ぬのもまた、一つの道なのでしょう。
それではさようなら
今生は、神により滅ぼされないものでありますように

フルサグより』

「・・・・・・」

いや

いやいやいやいや

やばいな神

やばいでしょう

自由か、フリーダムすぎるだろ

死んだ悲しみとか怒りとかも全部吹き飛んで唖然とするしかなかったよね

もしかしてそれも計算の内だったりするのか???

一人の子でしかない俺の頭ではとうてい理解することの叶わない思考回路で吃驚したわ。

てかニンフルサグって誰なんですかね・・・

聞いたことがないんですが？

マイナーを極めた神なのだろうか。

・・まあ、そんなこんなで、俺はこのハチャメチャな状況を、一周回ってＳＡＮチェックなしで切り抜けたわけだ。

――ニン

「・・・あ、君、目が覚めたんだね！」
思考を断ち切り、声のした方を向く。
青い髪に、穏やかな眼をもった、１０歳にも満たぬ美麗な少年がそこには居た。
「えっと、――ッ・・・君は、誰かな？」
一瞬、どもるが、何事もないように言葉を続ける。
驚いた。
喉から漏れ出る声は中性的で、自分のものとは異なっていたのだ。
「僕はジュリアン、具合はどう？　釣りをしようと思って海に行ったら、君が砂の上に倒れていたからさ。慌てて従者を呼んでここまで運んだんだ」
「・・・・・・そうだったのか、助けてくれてありがとう。感謝する」
女神様、転生させるならせめて前世の記憶を消したうえで、一般家庭の子供にして欲しかったです。
海岸スタートという、下手をしたら海水による溺死ＥＮＤが考えられる状態であったことに、頭が痛くなる。
「うん、顔色は良いね。待ってて、今医者を呼ばせたから」
ジュリアンと名乗った少年は、部屋の入り口にいた従者らしき男に声をかけたよう

だった。
窓からは、月の光が注いでいる。
少年が夜釣り・・・とは余り考えられないし、太陽の昇る明るい時間に俺は発見されたのだろうか。
「君、ソロ家という名は知っているかい？」
「ソロ家・・・？　いや、始めて聞く名前だ」
「なるほど・・・言葉は伝わるが、ここからは遠い場所から来たみたいだね。名前を聞いても？」
「名前・・・俺はエル・・・き・・・？」
はて、と言葉を止める。
２０数年、口に馴染んだ音を紡ごうとしてのだが、俺の口から出たそれは馴染みのないものだった。
「エル、か。あまり聞かない響きだな。・・・君からは、とても神秘的な雰囲気を感じるけれど、ギリシャの生まれではない・・・？　君の出身は？」
「・・・・・・・・・ごめん、それが、何も覚えていないんだ」
「！・・・そうか、いや、無理に思い出そうとしなくてもいい。海岸に人が打ち上げられるなんて、普通じゃ起こらないことだ。今はここで養生するといい」

「・・・ありがとう」
ごめんジュリアン少年。
君の優しさにつけ込むことにします。
いや、だってさ、今の俺ってあれじゃん。
天涯孤独で、頼れる相手が居なくて、――天の鎖じゃん
窓に映る、自分の姿を慎重に観察する。
若葉のような黄緑色の長髪に、男とも女とも取れる人間離れした美しい風貌の幼子。
その容姿は、自分の記憶の中のとあるキャラクターと極めて似ていた。
――エルキドゥ
それは、『フェイト』という作品に登場する、英雄の名だ。
神々によって作り出された天と地を繋ぐ鎖。
英雄王ギルガメッシュの唯一無二の親友にして、意志を持つ宝具。
それが、今の俺の、魂の器となってしまっている。
　感覚でわかってしまった――この身体は本物であると。
なんだか凄そうな存在なのに、何を気にしているのかだって？
まあ、理由はいくつかある。
まず、彼は作中でも最強候補の実力者で、それは彼の魅力の一つでもあるのだが・・・

果たして普通の人間だった俺に、その力を扱いきれるのだろうか？
答えは否、むりむりのむりだ。
単純な能力のコントロール云々の話ではない。
問題は、強大な力を生じさせることによって及ぼされる、周囲と俺の精神への影響。
――そう、俺は怖いんだ。
人の生死を気にしない神のように、何の迷いも抱かずに誰かを傷つけ殺すという――肉体だけで無く、人の心までも失ってしまう、そんな未来が。
それに、偶然与えられた力というのは、色々と危ないものだと思う。
血の滲むような努力によって力を昇華させた人は、心の在り方も相応に成長している。
力を持つ者の覚悟、責務・・・そういったものが、俺にはない。
だからこそ、「目が覚めたからはいさようなら」とはならずに、足場固めの時間を稼げそうなのは幸運だった。
どんな土地かわからない場所に放たれでもすれば、うっかり力を制御できずに、暴走・・・最悪、人ならざる化物として排斥される可能性もあった。
俺を助けてくれたのが、ジュリアンのような優しい少年で、本当に良かった。
「エル？　表情が暗いけど、どこか具合が悪いのかい？」

「えっ、あぁいや、なんでもない」
・・・あぁ、あと決め手はこれだな。
なんというかこう、単純に・・・憚られる。
俺は、エルキドゥのことが大好きなんだ。
温和で穏やかで、いざ戦いともなれば苛烈な戦闘能力を披露する、神々の武器。
そんな天上の魅力を凝縮したとも言える輝かしい英雄。
創作上の存在であろうともリスペクトに近い感情を抱いていた、憧れの存在。
会いたいとは夢想したことがあっても、成りたいとは思ったことはない。
だから自分が『エルキドゥ』であることに対する、抵抗が生まれている。
・・・。
・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・そうだ。
〝エル〟、勘違いで生まれたこの名前。
うん、これがいい。
〝エルキドゥ〟ではなく、〝エル〟、これを己と定義しよう。
バタバタと、廊下から慌ただしく白衣を着た医者が向ってくる。
女神は自爆してもいいと言っていたが、死ぬ気はない。

エルという、一人の人間として生きていこう。
俺は、前世を焦がれる自分を引き締めて、新たな今を生きる覚悟を決めた。

「エルー！　今日は従者の授業はないんだろう！　遊ぼう、海に行こう！」
「待って！引っ張るな！この課題を解いたら行くから！」
新しい身体で生きる覚悟を決めてから、一月の時間が流れた。
どうやらこの世界、俺の生きていた場所とは異なるようだ。
地球という星であることには変わりないのだが、歴史上の人物や事件がちょくちょく違っている。
極めつけに、１９７０年代ときた。
２１世紀にすらなっていない。
なんだかなあ
覚悟を決めたはずなのに、自分の住んでいた世界と基盤が同じだからだろうか。
ほんの少し、期待してしまう自分がいる。

元の自分に戻れるんじゃないかって。
未練たらたらだな。
話を現実に戻そう。
自分の名以外のものは何も覚えて居らず、捜索手配もされていないことから、俺はソロ家に引き取られることになった。
初めはソロ家の当主であるジュリアンの父親は、俺を孤児院へ送るつもりだったらしいのだが、ジュリアンの希望により、俺はこの家に仕える従者見習いとなった。
「なあ、ジュリアン。俺としては、住み込みで雇って貰えるのはこれ以上ないくらいに有り難い話なんだが・・・どこの誰かも分からない俺を、どうして従者にしようと思ったんだ？」
「・・・エルは年齢によらず、物事をちゃんと見ているよね。僕と同じくらいなのに、周りに流されず、自分の境遇に目を向けている」
「いや、そんな大層なものではなくて・・・単純に不思議だったから聞いただけだよ」
今の俺の外見年齢なんだが、小学校入学前の子供といった感じだ。
これちゃんと成長するんだろうか。
というか、ジュリアンも十分、年相応じゃない振る舞いをするときがあるので、お互い様だと思うんだ。

ジュリアンは少し考える素振りを見せてから口を開く。
「僕はただ人として当たり前の事をしただけだよ。自分の行動に責任を持てなければ、ソロ家の跡継ぎは務まらないしね」
「責任・・・？」
「倒れている人がいたら助ける。その人が記憶喪失なうえに、年端もいかない子供であったのなら、せめてその者が自分の足で立って歩けるようになるまでは、力を貸すべきだと僕は思ったんだ。なにもおかしな事はないだろう？」
「・・・・・・そう、だな」
確かに、おかしくはない。
理屈は通っている。
・・・だけど、それを6歳の子供がさも当然と語る様は、なんというか、気を遣い過ぎていると言わざるを得ない。
母親を早くに亡くし、父親もそう若くはない。
ギリシャ有数の海商、ソロ家の跡取り息子。
そんな逃れられない立場が、この少年を聡明たらしめているのだろうか。
それとも、何か他に要因があるのか。
無邪気に笑う子供特有の表情をするときもあれば、時折、カリスマとも呼べる圧を発

していることもある少年。
ジュリアンからは、稀に得体が知れない何かを感じることがあるのだ。
本人に自覚はなさそうなので口に出したことはないのだけれども。
普通の人間として生きると決めてから、この身体に宿る〝エルキドゥ〟の力を封印して一ヶ月が経つが、早計すぎただろうか。
・・・いや、やぶ蛇で知らなくて良いことを知る可能性もある。
あんまり硬く構えすぎるのも良くないな。
しかし、助けて貰った上に、記憶喪失であると偽り、騙している俺が言えることではないのだが
少し、ジュリアンことが心配になった。
課題を片付け、俺はジュリアンと共に、ソロ家のプライベートビーチへとやって来た。
本日は晴天なり。
太陽(ヘリオス)がさんさんと輝く空を見ると、日本もギリシャも、空の色は変わらないのだと心が穏やかになる。
「ジュリアン、今日は何をして遊ぶんだ?」
「今日は釣りをしようと思うんだ!エルは釣りをしたことがないんだろう?僕が教えてあげるよ」

「ほう、お手並み拝見ですね、ジュリアン坊ちゃん」
「・・・前から言っているが、僕に敬語は不要だ。壁を感じる」
「す、すまない・・・お客さんとかがいない限りは使わないから・・・・・・うん？」
「どうした？」
　他愛のない会話をしながら、釣り用具のある場所へ向う途中、海岸にキラキラと光を反射する物体が目に入った。
　不思議に思って近づくと、美しい艶やかな魚が、砂浜に打ち上げられていた。
　よく見ると、細い糸に絡まってしまっているようだった。
「かわいそうに・・・誰かが捨てた釣り針にひっかかってしまったんだね・・・さあ今とってあげるから」
「天気が良いのに乾燥はしていない。砂浜に上がってからそう時間は経ってないみたいだな」
　絡まった釣り針から解放された魚は、ジュリアンの手によってリリースされた。
　にしても器用だな、ジュリアン。
　魚って結構ぬるぬるしているはずなんだが。
　流石釣り好きなだけはある。
「童話で読んだ人魚ってきっと、あんな色をしているのかもしれないね」

「そうだなあ・・・もしかしたら、本物の人魚だったりしてな」
「だとすれば、この海岸は人魚と縁がある場所になるね」
「うん？　なんでだ？」
「あっ・・・」
　ジュリアンは一瞬、『しまった、口が滑った・・・』という顔をしたが、ゆっくりと口を動かし始めた。
「・・・エルを見つけたとき、僕はその・・・・・・人魚だと思ったんだ」
「は？」
「す、すまない・・・そんなお伽噺のようなことが現実に起るわけがないのに・・・だが、そう間違えても仕方がない程に、君の容姿は端麗だろう。人間離れした美しさで、まるで神に作られたかのような――」
「あ〟あ〟ぁぁぁオーケー分かった！分かったから!!　それ以上は俺がいたたまれないからやめて!!」
　確かに、ジュリアンの言葉は間違ってはいない。
　エルキドゥは聖娼シャムハトを模した美麗な容姿をしている。
　うん、だけどそれは、俺に向ける言葉じゃなかった。
　某英雄王に「不敬」と言われてエヌマられても文句が言えない案件なんですよ。

というか純粋に気が引けるんだよ言わせんな馬鹿！って感じだ。
聞かぬが仏とはこのことか。
全く予想外の方向から撃たれた気持になった。
微妙な空気が流れるが、俺は咳払いを漏らして、話題を転換することにした。
「・・ええっと、それで、これからどうしようか。釣りという気分でもなくなったんじゃないか」
「・・・そうだね・・・あぁ、そういえばエルは最近、神話について調べているんだっけ」
「え？　あぁ、そうだな」
俺を転生させた女神『ニンフルサグ』がどこの誰なのか、そしてこの世界の神話が俺の前世のものと、同じ内容なのか。
それを知る為に空いた時間を見つけて調べていたのだ。
・・・インターネットがないので、進捗はよろしくないのが辛いところだな。
「よし、じゃあ今日は僕がギリシャ神話についてレクチャーしよう。ちょうど近くにポセイドン神殿の跡地もあるしね」
「ギリシャ神話か・・・面白そうだ」
ギリシャの、現地に住んでいる人間の口から語られる神話というものに、好奇心がわいた。

俺達は海の果てを眺めながら、遠い昔のギリシャの物語に花を咲かせたのだった。
え？メドゥーサを怪物にしたのアテナだったの？

俺が転生してから９年、
ソロ家の当主、ジュリアンの父親が倒れた。
病により、意識を保っていられる時間も短く・・・医者の話によると、そう長くはないとのことだった。
ジュリアンの父親が亡くなると、その後を継ぐのは当然、一人息子のジュリアンとなるのだが・・・。
ジュリアンはまだ１５歳の少年だ。
日本なら中学３年生が、高校生になる、そんな年齢。
いくら彼が人並外れた才を持っていても、重圧が過ぎる。
潮混じりの夜風が肌に染み入る。

海が、泣いている。
大地と?がっていないのに、エルキドゥの力を封じているはずなのに、なぜかそう感じた。
「ここにいたのか、ジュリアン」
「・・・エル」
屋敷を出て、少し歩いたところ。
スニオン岬(みさき)。
かつて、ポセイドン神殿があった場所。
そこに、俺の小さな主は、うずくまるようにして座っていた。
「・・・帰ろう、ジュリアン。ここにいては、風邪をひいてしまう」
「帰りたくない」
「・・・・・・そっか」
なんとなく、そう返される気はしていた。
俺は持ってきていたジュリアンの上着を、彼の肩にかけた。
・・・うん、この9年で、随分と成長したよな。
見た目もどちらかといえば、少年というより青年だ。
やはり、日本人基準で考えると、外国人は成熟するのが早いな。

無言で、彼の隣に座る。
地面はひんやりとしていて、薄氷の水面を連想させた。
「・・・エルは、凄いな」
ぽつりと、ジュリアンが呟いた。
「天涯孤独の身空で、ひとり懸命に生きる。・・・言葉にすれば容易いが、現実にそれを飲みほす強さを、エルは当然のようにもっていた」
「・・・・・・・」
「父も若くはない。いつかは僕が後を継ぐことになると、頭では理解していたのだ・・・だが、父を失い、たった一人で、ソロ家を存続、発展させるという使命を遂げられるのか・・・・・・僕には、荷が重い」
少年は吐露した。
血縁者が消える恐怖を。
偉大な父の後継となる不安を。
俺はただ座って、彼の言葉を聞いていた。
胸中の言葉を連ね終えたのか、ジュリアンは口を閉じる。
岬に数回さざ波が当たった頃に、俺は口を開いた。
「ジュリアン」

「・・・なん――」
「逃げてもいい」
「えっ？」
「つらいとき、現実に押し潰されそうになったときは、いっそのこと逃げるのも一つの手だ」
「っ・・・そんなこと・・・許されるわけがない・・・！」
「誰であろうとも、誰かの人生を決めつけて、縛り付ける権利なんてもってない。例えそれが、実の親や、ソロ家の人間であったとしても」
「・・・・・・」
　人は、自らの意志によって選んだ道を歩むべきだ。
　最初から選択肢が一つしかない、そんな人生は、自由がないのと一緒だ。
　ソロ家に対して、恩を仇で返すような形になっても・・・俺はジュリアンには、自らの望む未来を手にして欲しい。
「選択肢が一つ増えた、と考えてくれればいい。ソロ家を継ぐのもよし。俺と逃げるのもよし。まだ時間はある。自分が納得できる道を見つけて欲しい。・・・・・・あと、一つ訂正させてもらう」
　俺は隣に座る少年の目を真っ直ぐと見つめて、言葉を紡ぐ。

「ジュリアンは、ひとり懸命に生きる俺は〝強い〟と言っていたが、それは間違いだ」
「間違い・・・？　どうして」
「俺は別に、強くはないんだ。確かに、今の俺に血縁者はいない。だけど、俺にはジュリアンがいた。ソロ家の当主様や従者さん達がいた。けして、孤独ではなかった」
「僕が・・・」
「孤独ではない・・・それは君にも言えることだ。君は、ひとりじゃない。例え近い未来に大切な人を失ったとしても、周りには、君を支えてくれる人が大勢いる。・・・それにな、人は死しても、その人の想いは生き続ける。当主様が亡くなられても、当主様のジュリアンを愛する心は、ジュリアンの中に残って、君が困難に立ち向かうときに助けてくれる導となる」
　少し恥ずかしくなることを言ったが、事実だ。
　一度死に、前世とは異なる世界に生を受けた俺の中にも、親が俺にくれた愛情や、様々な人からもらった想いは、今もなお存在し、俺の事を守ってくれている。
　人の想いは、生き続ける。
　世界を超えても消えない程に、愛とは強固な存在なのだ。
「〝逃げてもいい〟と言った後に話す内容ではなかったかもしれない・・・だけど、ジュリアンが皆のことを忘れて、一人で全てを背負おうとしていたのが分かったからな。

知って欲しかった。思い出して欲しかった。重い荷物を、一緒に担ぐ人間が沢山いるってことを」

人格者の父親が危篤という、焦らずにはいられない局面。

冷静でいられないのも当たり前で、普段見えていたものが、視界から消えてしまう。

それは、人間であれば仕方の無いことだ。

どれだけ器が大きくても、溢れるときは溢れてしまうのだから。

ジュリアンは目を伏せた。

真剣な表情で、俺の言葉を咀嚼し、己の心と対話しているようだった。

波の音も消え、世界は静寂に包まれる。

暫くして、隣に座る少年の口から、音が発せられた。

「僕は今まで、何も見えていなかったのだな」

苦笑混じりの溜息を漏らして、ジュリアンは立ち上がった。

そして、岬の先端へ歩みを進めた少年は、月光の中で振り向く。

彼は、夜の海のように静かな――それでいて強い意志の籠もった眼で、俺を見据えた。

「エル、決めたよ。僕は・・・いや、私は、偉大なる父の後を継ぎ、ソロ家の当主となる」

迷いのない、真っ直ぐな、決意の言葉だった。

不安も恐れも、完全には消えてはいないのだろう。

だが、そんな重みすらも錨と変えて、荒波にも、嵐にも負けずに立ち向かってみせる・・・そんな覚悟を感じた。

だとすれば、俺のやることは自然と決まったな。

「よし、任せろ。俺も全力でジュリアンをサポートする。嵐も神鳴も撥ね除けて、君の進む道を創ってみせよう」

「エル・・・！　感謝する・・・そして、これからもどうか、よろしく頼む」

「うん、よろしくな、ジュリアン」

優しい恩人に報いるため。

従者として主人に仕えるため。

大切な友人の心を守るため。

色々な思いをのせて、俺は少年に言葉を返した。

想うが故に、擦れ違う

「それではジュリアン様の１６歳の誕生日を祝して乾杯――！」
「「乾杯！」」
３月２１日。
今日のソロ邸は、普段とは異なり賑やかだ。
「・・・お嬢様、驚きましたね。世界中の名士が集まってますよ。まあ世界一の海商王の一人息子ジュリアン・ソロ様の誕生パーティですから、当然かもしれませんが・・・たかがガキんちょの誕生祝いに、ちょっと大げさすぎやしませんかね？」
「まあ・・・口を慎みなさい。辰巳」
パーティの客人に紛れて巡回をしていると、聞き捨てならない言葉が聞こえた。
・・・なんだ？
この場でジュリアンを貶す発言をするとは、辰巳とかいう声の主は、ソロ家に恨みで

もあるのか、それともただの馬鹿なのだろうか。
気づかれないように気配を消しながら目を向けると、厳つい面をした男と、桃色の髪を腰まで伸ばした美少女がいた。
「ジュリアン様は16歳とはいえ、先日亡くなられたお父上の遺産を全て譲られて、今や事実上のソロ家の総帥なのですよ・・・血筋はもとより頭脳明晰、容姿抜群といわれている大変なお方なのですから」
「は・・・申し訳ありません」
恐縮した様子で男が頭を下げる。
あぁ思い出した。
桃色の少女は確か、日本のグラード財団のご令嬢、城戸沙織（きどさおり）さんだ。
彼女は数年前に亡くなられたグラード財団総帥、城戸光政の後を継ぎ、齢13歳にして財団のトップを勤めている。
「フッ、私の噂話とは嬉しいですね、ミス・サオリ」
噂をすればなんとやら、というやつだろうか。
まあこの会場内の話題の8割は彼に関係するものなのだろうが。
「ジュリアン・ソロです。今夜は私の誕生日によく来てくれました」
16歳になったジュリアンが、沙織さんに声をかけたようだった。

にしても珍しいな。
ジュリアンが自分から声を掛けに行く光景はあまり見たことがない。
「こちらこそ、お招きにあずかりまして光栄ですわ」
「ミス・サオリとは初めてお会いするが、私の父と城戸光政翁は親交があったと聞いています」
「えぇ、お爺さまからもギリシアの大富豪、ソロ家のお話は伺っておりました」
「貴方に一度お会いしたいと思って、今夜こうしてお招きした次第ですが・・・いや、想像以上にお美しい。私の大切な友と出会った日を思い出しましたよ」
「まぁ、慕われているご友人がいらっしゃるのですね。素敵なことですわ」
「そう、ですね・・・。貴方とは二人きりでお話がしたい。テラスへ出てみませんか」
「えぇ」
「あ・・・お嬢様」
ジュリアンと沙織さんは二人きりでテラスへと向っていった。
外にも精鋭の警備はいるし、心配はいらないだろう。
・・・。
・・・・・・・。
・・・・・・・・・・うん、二人の邪魔はしちゃいけない。

なんせ、ジュリアンの初恋だからな！
あんな積極的に誰かを連れて行くジュリアンなんて初めてだ。
つまり、沙織さんにハートキャッチされちゃったとしか考えられない状況なのだ・・・！
ここ数日元気がないようで心配だったが、女の子を誘えるのなら心配不要だな。
「お・・・お嬢様・・・。チッ・・・まあ、あんな奴にお嬢様がどうこうされる訳もなかろうが・・・しかし、虫の好かん奴だな」
・・・2枚目のイエローカード、ということにしておこう。
本当なら一言目で一発アウトとしてもよかったのだが、ここは幼くして頑張っている沙織さんの顔を立てて、聞かなかったことにしてやる。
辰巳とやら、次はないからな。

星空の下で、ジュリアン・ソロと城戸沙織は言葉を交わしていた。
「――わがソロ家は何百年も前から、この地中海を中心に七つの海を制覇し、巨万の富を

得たのです。・・・父がよく言っていました、海を制する者は世界を制すると」

静かに波打つ海を眺めながら、ジュリアンは言葉を連ねる。

「ソロ家の血筋に生まれた者として、偉大な父の想いを継ぐためにも、七つの海を支配し、世界を手に入れなければならない・・・幼い日の私は、そのように生きることが、己の使命なのだと思っていました」

「思っていた・・・今は、違うのですか?」

「えぇ・・・ソロ家を発展させたい、という気持は変わらないのですが・・・私の本当の願いは、世界を支配することではないのです・・・。私はただ、友と、穏やかに日々を過ごせればそれだけで幸せなのです」

「先程おっしゃっていた方ですね・・・しかし、ジュリアン様の口からそのような言葉を聞くとは思いませんでした」

「・・・・・・」

「どうかされましたか?」

暗い表情で、口を閉じるジュリアンを不思議に思い、沙織は声をかける。

ジュリアンは僅かな逡巡の後に、口を開いた。

「初めてお会いする方に話す内容ではないのですが・・・貴方になら、話しても許されるだろうか・・・」

「話して楽になることもありましょう・・・私で良ければ、相談にのりますよ」
「・・・有り難うございます。実は、私の従者であり、友人でもある”エル”という者のことなのですが・・・」
　彼は意を決したように、己の悩みを語り始めた。
「エルは私のことをジュリアン・ソロではなく、ただのジュリアンとして接してくれる、唯一の存在なのです。・・・彼は、幼い頃の私の口添えにより、ソロ家に仕える従者となりました。そして、私が孤独と重圧に押し潰されそうになったときに救ってくれた・・・今の私にとって、欠けることのできない朋友で・・・これから先も共に歩めると、そう信じて疑わなかった。・・・・・・しかし先日、私は重大な間違いを犯していたことに気づいたのです」
　口を硬く引き結んで、彼は眉間に皺を刻んだ。
「エルには――――自由がない。従者となった瞬間に、彼の未来は殆ど決められてしまった。自分の人生の道筋は、誰かに縛られるものではなく、自らの意志で決めるべきものだと・・・そう、エルに教えられた。それなのに私は、エルの人生を、彼の未来を縛りつけてしまっている。・・・これは、裏切り以外の何ものでもない」
「・・・・・・」
　16歳の少年は、血を吐くようにしてそう言った。

賑やかな屋敷の中からは、楽しそうな笑い声が聞こえてくる。
しかし、ガラスの扉を一枚隔てたテラスは、重苦しい空気に支配されていた。
「・・・せっかく遠い日本から、私の誕生を祝いに来てくださったというのに・・・このような話を聞かせてしまって申し訳ありません。忘れてください・・・さあ、会場に戻りましょう」
「いいえ、ジュリアン様。貴方が胸中に秘していた思いを話してくれたのです。私にも、言葉を返す時間をください」
「沙織さん・・・」
13歳の少女は、真剣な表情でジュリアンを見据える。
その姿は、暗闇を照らす夜空の星、希望の光のようだった。
「私にも、とても大切な人達がいます・・・彼らは私を助けるために血を流し、中には、こうしている今も意識不明の状態で、生死の境目にいる者もいます」
「生死の境目・・・なんという・・・」
「私は、彼等には感謝しきれない程の、多くのものを授かりました。そして、知りました。人の想いが織りなす力の強さを。愛する者の為に戦う人間の、気高き意志の可能性を」
凛と佇む桃色の少女は、言葉を続ける。
「ジュリアン、貴方の友を想う心を、そしてエルさんを信じなさい。貴方は裏切り者など

ではありません。・・・気乗りはしないでしょうが、どうか勇気をだして、エルさんに思いの丈を話すといいでしょう。大切な存在だからこそ、言葉を交わさなければならぬ時もあるのです」

「しかし・・・」

「どれだけ相手を想っていても、言葉にしなければ届きません。・・・それに、大丈夫ですよ。聞いている限り、エルさんはもう既に自らの意志で・・・」

「・・・？」

「・・・これは私の口から言うべきではありせんね、お気になさらず。・・・私は先に戻ると致しましょう」

そう締めくくり、城戸沙織はパーティホールへと歩んでいく。

ジュリアンは去って行く背中が見えなくなるまで、その場に立ちつくした。

「・・・私自身と、友を信じる、か。一体どのような人生を送れば、１３の少女がこのような言葉を口に出来るのだろうか・・・私も見習うと同時に、決心しなければなるまい」

自分に言い聞かせるように、ジュリアンは虚空へと呟き、空を仰ぐ。

決意を固めるために、己の心を引き締めていく。

静かに、瞼を降ろす。

同年代の子供にすら、ソロ家の嫡男としてしか扱われたことのなかった自分に出来

た、初めての友達。
一年前、父を失う恐怖と、己の立場の重みに怯え、震えていた自分を励ましてくれた恩人。
そんな彼の自由を奪っていた自分に気づいてもなお・・・これからも共に歩みたいと願っている、傲慢な今の自分。
許されるだろうか、幻滅されてしまうのだろうか。
不安に塗れた胸の内をさらけ出して、友は私になんと返すのだろうか。
・・・だが、怯えているだけでは駄目だ。
沙織さんにも言われたとおり、勇気を出して、エルに伝えなければならない。
――従者と未来を決められて、君は幸せを掴めるのだろうか、と。
「そろそろ私も、会場へ戻らなければな・・・」
そう呟き、ジュリアンは閉じていた眼をゆっくりと開け――――
視界に映る光景の中に、不審なものを見つけた。
「なんだ、あのスニオン岬に光るものは・・・？　あの岬にはポセイドン神殿以外何もないはずだが・・・――――ッ！」
ドクン、ドクン――
少年の心臓が、力強く脈動を始める。

ふらふらと、それでいて確かな足取りで、ジュリアンは光の下へと向っていく。
まるで引き寄せられるように。
自らの誕生パーティのことも、数分前の己の悩みすらも忘れて。
暫く歩き続けて辿り着いた、スニオン岬の先端。
一年前に、友人に決意を伝えた丁度その場所に――――黄金の輝きを放つ三つ叉の鉾が突き刺さっている。
かの有名なアーサー王物語の、選定の剣を彷彿とさせる、そんな状態で、三叉槍が存在したのだ。

「こ、これは一体・・・」
「――それは、神話の時代から貴方様の物でございます」
「な、君は・・・この三つ叉の鉾が私のものだって・・・?」
ジュリアンが振り向くと、金髪の女性が跪き、頭を下げていた。
その身は鮮やかな桃色の鎧に包まれており、人魚のように美しい。
「そうです、ジュリアン様・・・いいえ、海皇ポセイドン様!」
「っ・・・ポセイドン!? 馬鹿な、僕が海皇ポセイドンだというのか!?」
「そうです。ジュリアン様こそ神話の時代より全ての海を支配なされた、海皇ポセイド

ン様の化身なのです。・・・貴方は、二百数十年ぶりに長い眠りによりお目覚めになられたのでございます」

狼狽するジュリアンに、女性は言葉を続ける。

「私達も今やっとこうしてポセイドン様をお迎えにあがることができました。さあ、私と共にポセイドン神殿においでください」

「ポセイドン神殿・・・？」

「そうです、そここそ海皇ポセイドン様が支配者として檄を飛ばされるに相応しい海の聖域。貴方様と同じようにこの世に復活した海闘士（マリーナ）・・・海将軍（ジェネラル）たちもそこでお待ち申し上げております。――――さあ、参りましょう。私にしっかり捕まってくださいませ」

鎧の女性は、ジュリアンを恭しく腕で抱き寄せる。

そして、スニオン岬の先端から、暗い海へと・・・

――――身を、投げた。

「ッ!!?　な、何をする――ッ――・・・」

突然のことに抵抗するまもなく

ジュリアン・ソロは、海に落ちていった。

巡回と今日の業務を終え、自らの部屋にあるベッドに沈む。
「・・・ジュリアン、俺が持ち場にいる間はテラスから帰ってこなかったな」
途中、沙織さんが一人でテラスから戻ってきた時点で察した。
あぁ、振られたんだな、と。
初恋の後に、初失恋。
・・・うん、同情するしかない。
それにしてもなあ、ジュリアンは顔も性格も頭も良いし、海商王ソロ家の総帥。
そんな男を振るとは・・・沙織さんは好きな男性でもいるのだろうか。
まぁ、立場的に決断が難しい問題だしなぁ、縁が無かったということだろう。
「・・・8時36分か」
パーティはあと四半刻もしないうちに終る頃合いだ。
・・・流石にもう、会場には戻っているだろうが、後からフォローしてあげないとだな。

それに、今日はまだ眠るわけにはいかない。
まだジュリアンに伝えていないのだ。
――誕生日おめでとう、と。
眠たい頭がシャットダウンしてしまわないように、必死に脳みそ動かしていると、廊下から慌ただしい足音が聞こえた。
何かあったのだろうか、そうぼんやりと考えていると、ノックもなく、扉が開いた。
「エルくん！　休んでいるところ済まない」
「執事長さん？　なにかあったんで・・・――」
「いいかい、落ち着いて聞くんだ――――ジュリアン様が姿を消した」
「・・・・・・は？」
一瞬、思考に空白が生まれる。
「グラード財団の城戸沙織お嬢様とテラスへ向われて、その後一人で夜風に当たられていたところまでは把握しているのだが・・・・・・しかし、その後から忽然と、まるで神隠しにあったかのように居なくなってしまったらしく、」
「警備は？　外にいた者達は何をしていたのですか？」
「・・私も未だに信じられないのだが、全員、部分的な記憶に穴が開いている状態で・・・気がついたらジュリアン様を見失っていたと」

「・・・・・・」

「異例の事態ゆえ、屋敷の警戒レベルを最高まで引き上げた。手の空いた者はジュリアン様を捜索するように言って回っていたのだ・・・頼んだぞ。・・・あぁ後、このことはお客人方には内密にするように」

今までにないほど焦った顔をした執事長は、そう言って部屋から出て行った。

「・・・くそ」

拳を強く握る。

爪が深く食い込み、血が流れる。

だめだ、

冷静になれ。

考えることを止めるな。

ジュリアンが自らの意志で姿を消したとは考えられない・・・となると、誘拐なのだろう。

いったい何故、よりによって今日なのだろうか。

急いで部屋着から従者の服に着替えた俺は、部屋のドアノブに手を掛けた。

あぁ、こうしている間にも、ジュリアンは――――

「きゃあああっ!!」

「ッ――・・・上の部屋か！」
次から次へと、一体何が起ってるんだ！
確か上の部屋は・・・客室だったはず。
俺はベランダに滑り出ると、自らに施した封印を僅かに解放し
――跳躍した。
「フッ、この小娘が女神の化身・・・連れて行けばポセイドン様もお喜びに――」
「お客様ぁ！　緊急事態ゆえ失礼いたします！」
「だっ、誰だ貴様!!」
「こっちのセリフだ馬鹿野郎！　吹っ飛べ!!」
「ぐあぁぁぁあ!?」
侵入者と思わしきヘンテコな鎧を着た男を認識するやいなや、俺はその土手っ腹に一発拳を撃ちこんだ。
不審者は天井に身体を激しく打ちつけて、床に落ち、意識を失った。
「・・・驚きました、ジュリアン様の従者に、これ程までに強い方がいらっしゃったとは」
「貴方は確か・・・城戸沙織様ですね。俺・・・じゃなくて私はエルと申します。・・・このような者の侵入を許すだけに留まらず、女性のお部屋にノックもなく上がり込んでしまって面目次第もございません・・・直ぐに処置を致します」

「！　貴方が・・・いいえ、助けてくださって有り難うございます」
「お、お嬢様！　どういたしましたか！」
「アテナ!!　ご無事ですか！」
「・・・アテナ？」
　辰巳とかいう沙織さんの従者が入ってきたと思えば、ベランダから黄金の鎧を纏った男が現れた。
　侵入者の男がポセイドンの名を口にしていたが、その次はアテナ、か。
「辰巳、アイオリア・・・私は無事です。この方、エルさんに助けて貰いました」
「こ、このガキがですかぁ？」
「君がアテナを・・・感謝する。・・・しかし、一般人の少年が、このような・・・」
　男の着ていた鎧は粉々になり、叩きつけられた天井は僅かに歪んでいる。
　・・・あぁ、やばい、やり過ぎたかもしれない。
　怒りで予想以上に力が入ってしまった。
　反省しつつも、俺は見逃しがたい疑問を投げかけることにした。
「・・・城戸沙織様、このアイオリアさんという方は貴方のお知り合いのようですが、あなた方は一体、何者なのですか？　・・・鱗のような鎧の侵入者と、黄金の鎧を纏う者。とても無関係とは思えません」

「きっ貴様、ズケズケとお嬢様に失礼だぞ！」
「申し訳ありませんが、こちら側としても背に腹は変えられない状況なので、話してくださるまで引くつもりはない」
「な、このガキ・・・」
「――辰巳、お黙りなさい。・・・エルさん、背に腹は変えられないとは、どういうことか伺っても？」
「・・・・・・お客様には内密にしなければならないのですが、恐らく関係者だと思われますしお話します・・・ジュリアン様が姿を眩まされました」
「ジュリアン様が・・・！」
「沙織様、何か知っているのでしたら教えて頂きたい・・・この通りです、お願いします」
　俺は腰を深く折り、彼女に頭を下げた。
　部屋に沈黙が満ちる。
「エルさん、どうか顔を上げてください。・・・お話します」
「沙織様・・・！　感謝します」
　俺の言葉に沙織さんは穏やかに微笑んで、静かに目を閉じた。
　そして、彼女は語り始めた。
「私はグラード財団の総帥、城戸光政お爺さまの孫であり・・・そして、戦いの女神アテ

ナの化身なのです」

「・・・・・・貴方が、ギリシア神話に出てくる神であると」

「ええ、そのアテナです。そして、彼はアテナの聖闘士(セイント)の一人、黄道十二宮が一つ獅子宮を守護する、獅子座(レオ)のアイオリア・・・聖闘士とは、この世に邪悪が蔓延るとき、女神の元に集う、希望の戦士のことをいいます」

「アテナと、その聖闘士・・・まるでフィクションのような話だ。・・・では、この不審者は何者なのですか?」

まあ、俺も神により転生をし、エルキドゥの身体を与えられた人間だ。

あり得ないことなど、あり得ない。

現に起ってしまっているのだから、信じるしかない。

そういうものなのだろう。

「・・ポセイドンという名に、纏っていた鱗のような鎧・・恐らく、この者は海闘士・・・海皇ポセイドンに仕える戦士と考えるのが自然なのでしょう」

「海皇ポセイドン・・・まさか、かの神が復活したというのか・・・」

アイオリアさんが低い声で呟いた。

沙織さんは考えるように顎に指を当てる。

「海皇の封印が解けた・・・? しかし、何故ジュリアンを攫ったのでしょう・・・――

――まさか、」
「お嬢様？」
「・・・辰巳、直ぐに日本へ戻る用意をなさい」
「えっ？　は、はい！」
「は？　ちょっ、沙織様!?　待ってください、まだ大切なことを聞いていません!!」
突然、何かに気づいたかのような顔をしたと思えば、従者に帰る用意をするように言った少女に、俺は焦った声を漏らす。
彼女が女神だったとか、この黄金の鎧の男が聖闘士だとかいう話は驚きはしたが、もっと重要なことをまだ聞いていない。
「そのジュリアンを攫ったポセイドンという神はどこにいるんです！　・・・些細なことでも構いません、教えてください」
「・・・知って、どうするというのですか」
「そんなの決まってる、攫われたジュリアンを連れ戻す」
それ以外に、何があると言うのだろうか。
どうしてそんな当たり前のことを聞くのだろうか。
苛立たしげな視線を向けると、沙織さんは困ったような、悲しそうな表情をしていて、思わず俺は困惑してしまった。

「・・・エルさん、貴方は海闘士を圧倒する力を持った、強い方なのでしょう・・・しかし、相手は海皇。貴方が叶う存在ではありません・・・いいえ、例え貴方が神に勝る力を持っていたとしても、貴方は、行くべきではありません」
「・・・？　俺は別に、海皇と戦うつもりは・・・」
「ジュリアンを取り戻すためには、ポセイドンとの戦いは避けられません。そして、それは貴方にとっても、ジュリアンにとっても望まない形のものとなるでしょう」
「・・・意味が分からない」
「エルさん、ジュリアンは私と聖闘士が、女神の名にかけて取り戻します・・・ですから、貴方はこの屋敷で、ジュリアンの帰りを待つのです。それが、貴方達にとって、最良の選択なのです」
「・・・・・・・・・・」
あぁ、決して、この少女の言葉は間違ってはいないのだろう。
神の力とは、無意識に天災を起こしてしまう程に強大なもの。
普通の人間では相手になることすら愚からしい、そんな存在。
きっと、俺の知らないことを沙織さんは沢山知っていて、ジュリアンを助けるためには、女神である彼女が相応しいのかもしれない。
「無理を言って申し訳ありませんでした・・・どうか、ジュリアンをお願いします」

俺がそう言うと、沙織さんはほっとしたように息をついた。
・・・あぁ、大人げない、頭に血が上っていたようだ。
相手は女神とはいえ、１３歳の少女なのに、俺は責めるような言葉をぶつけてしまった。
反省しなければならない。
沙織さん達は屋敷を出て行った。
そして、俺も決心がついた。
――普通の人間としての時間を、終わりにする覚悟を
「全力解放（フォルティッシメー・エーミッタム）」
身体中を、熱い力の奔流が流れ回る。
心優しく穏やかで、苛烈な神々の兵器、英雄エルキドゥの力が蘇る。
海皇ポセイドンがどこにいるのか分からなければ、自分の力で探せばいい。
沙織さんはジュリアンを救出してくれると約束してくれたが、だからといって、このまま手をこまねいているなんて、俺にはできない。
俺は、俺の力で、ジュリアンを助けに行く。
「ぐうっ・・・流石に９年も封印していたからか・・・制御に時間が要るな・・・」
現実はそう甘くはないか。

だが、良い。
何もできないでいるくらいなら、全然ましな状況だ。
・・・待ってろよジュリアン。
絶対に死なせたりはしない。
沢山頑張って、血の滲むような努力を重ねて、ソロ家の総帥になった少年。
そんな彼の進む道が、神なんかの都合で滅茶苦茶にされるなんて許容できない。
俺はジュリアンを支えると決めたのだ。
主人だから従うのではない。
友達だから、力になりたいんだ。

守りたい人のために

力を解放した俺は、まず矢先にとスニオン岬へ向った。
なにせ、かつてポセイドン神殿があった場所だ。
今回の騒動の元凶がポセイドンなのだとすれば、きっと、何かしらの手掛かりがあるはずだ。
藁にも縋る思いで、俺は遺跡の中を見て回った。
・・・そして、遺跡を出たスニオン岬の先端部分――ジュリアンと約束を交わした場所。
そこに、月の光を反射する物体と、今までにはなかった奇妙な痕を発見した。
光を反射していたものはジュリアンの愛用していたペンだった。
地面の奇妙な痕には、神性を帯びた魔力が僅かに残留している。
　剣を地に突き立てれば、こんな痕ができそうだ。
「・・・当りだな」
ジュリアンはテラスから姿を消したあと、ここに来たんだ。
そして、考えたくもないが・・・この岬の下――海へ連れて行かれたのだろう。

海皇の拠点は海の中か・・・厄介な。
エルキドゥは自然と調和、一体化する大地の分身でもある。
故に、大地を通じて遠距離の気配を察知することが可能なのだが・・・海は、どうしてもその精度が劣る。
海も自然の一部、調和を図れない訳ではない。
しかし、精密な気配探知ができないのだ。
今はただでさえ力の制御がままならないのに。
「海が荒れてきたな・・・」
海皇復活の兆しか。
俺は意を決して跳躍し、広大な海へと飛び込んだ。
下へと潜れば潜るほど、月の光を拒絶する暗闇が広がる。
まるで、光の存在しない世界に迷い込んだようだった。
本能的に不安を訴える心を叱咤し、身体を世界と繋げていく。
自然と同化していくことで、違和感を炙り出していく。
『・・・ッ！　なんだ、この魔力の流れは？』
何者かの意志が、海と？がろうとする俺の邪魔をするような・・・
・・・あぁいや、文字通りか！

海が、ポセイドンの支配下に置かれているんだ。
妙な力場が何カ所にも発生している。
不味い、これじゃ遠くの気配を感知することができない！
・・・こんなことになるのなら。
俺は、今更ながらに後悔をしていた。
――どうして９年もの間、エルキドゥの力を封じていたのだろうか、と。
誰かを傷つけることを恐れて、自らが排斥されるかもしれないと言い訳をして・・・ただ、力から逃げていただけじゃないか。
俺を殺した神のような強大な力を持てば、自分の中のちっぽけな人間が死んでしまうと理由をつけて。
だけど、そんなの些細な問題だったんだ。
友達一人守れないくらいなら、平和な日常を送る資格なんて掴めるはずもなかったんだ。

・・・分かっている、自分を責めたってジュリアンは帰ってこないと。
これ以上、後悔をしていても仕方がない、不毛なだけだ。

――あぁそうだ、昔、誰かが教えてくれたじゃないか。
選択を誤ったときに、大切な事を。
失敗しないのが美徳なんじゃない。
『大切なのは、失敗した後に、どう対処するのか・・・だったよな』
外に伸ばそうと藻掻いていた力を止める。
今の俺が為すべき事を考える。
ろくに気配の感知も出来ない。
折角のエルキドゥの力も、封じた時間が長すぎて、上手く扱えない。
そんな俺に出来ること・・・それは、この悔しさを抱えて、這ってでも前へと進むことだろう。
自らの外から内へ、魔力の流れを切り替える。
足下にありったけの魔力を集中させて、エネルギーを発生させていく。
遠くの気配を探れないのなら、片っ端から海とい海を調べればいいだけの話だ。
魔力を一気に解放させて、俺は勢いよく海中を蹴った。
海が、爆発した。
前へ、前へ・・・！
俺は、海に満ちる神の力に逆らって、流星の如く突き進んだ。

ソロ家の当主、ジュリアン・ソロが行方を眩ましてから、数日が経過した。
地球は未曾有の大雨に晒され、徐々に上がる海面が、人の居住区を浸食しつつあった。
――中国の名山、廬山の五老峰。
大瀑布の激流が唸り声を上げ、空気を震わした。
「フム・・・何か、雨の勢いが僅かだが衰えたような・・・」
豪雨が降りしきる中、突出した岩の上に座る、小柄な老人が呟いた。
男の正体は聖域十二宮の一つ、天秤宮を守護する天秤座（ライブラ）の黄金聖闘士（ゴールドセイント）の童虎（どうこ）である。
今は訳あって己の守護する宮を離れている状態だが、彼は２４３年前に起きた前聖戦の生き残りでもある、確かな実力者だ。
「フッ、さすがは老師。よくおわかりですね・・・」
雨と滝の水音が支配する空間に、突如として女の声が響いた。
大瀑布の流れ逆らうようにして、水中から桃色の甲冑を纏った女性が現れる。
その鮮やかな出で立ちは、まるでお伽噺に出てくる人魚のようだった。
「ホッ、これは珍しい。人魚か!?」
「いかにも、私は人魚姫（マーメイド）のテティス。老師、教皇亡き後、聖闘士の頂点に立つお方として、

海皇ポセイドン様より伝言をお持ちしました」
「ポセイドン、この数日間の長雨は海皇の仕業か・・・いったい、いつ止めるつもりかの」
「そんなことよりアテナ様のお命をご心配ください」
「なに?」
「アテナ様はポセイドン様を説得するつもりで、ポセイドン神殿へ訪れましたが・・・今は、メインブレドウィナの中にて、この雨の勢いを減らしておいでです」
「むう・・・」
　メインブレドウィナ。
　それは、ポセイドンの海底神殿の奥にある、神殿を支える大黒柱の名だ。
　海将軍が守護する7つの大海の柱を破壊しない限り、傷つけられない強固な柱で、今は女神が閉じ込められている場所でもある。
「柱内の水が満たされればアテナ様は死に、また雨が勢いよく降り続きましょう・・・ポセイドン様の探し人が見つかれば、大雨だけでなく、津波や洪水も地上を襲うことになります」
「フッ、事実上の宣戦布告じゃの」
「もしアテナ様を救いたければ、ポセイドン神殿までおいでくださいということです。勿論そこには我が海闘士の誇る七将軍がお待ち申しておりますので、そちらも、黄金聖

闘士が来られる方がよろしいでしょう」
「――そんな心配はいらないぜ。わざわざ黄金聖闘士が出向くまでもない」
「そうとも、俺達だけで沢山だ」
「ば、馬鹿な、貴方達は！　星矢、氷河、瞬、紫龍・・・!!」
童虎とテティスの会話に、新たな参入者が現れた。
天馬星座（ペガサス）の星矢、白鳥星座（キグナス）の氷河、アンドロメダ星座の瞬、龍星座（ドラゴン）の紫龍。
彼等は女神を守る、青銅（ブロンズ）の聖闘士（セイント）だ。
１３歳という年若い身でありながら、今より少し前の地上で、女神（アテナ）の命を救うために上位の実力を持つ、白銀や黄金の聖闘士と死闘を繰り広げた戦士でもある。
女神の聖闘士達。
彼等は本来なら、聖域（サンクチュアリ）を拠点とし、黄道十二宮を上った先にいる女神と、地上の平和を守るために戦う。
しかし、１３年前に双子座（ジュミニ）の男の手により聖域が支配されてからは、その常は破られてしまう。
生まれたばかりの女神は命を狙われ、女神の代わりに聖闘士達を統治する教皇は双子座の男によって殺された。
射手座（サジタリアス）の聖闘士の命懸けの抵抗により、命からがら逃げ延びた女神は、城戸光政の孫

として、日本で育ち、時を過ごす。
そして、星矢たち青銅聖闘士を伴って、聖域を取り戻す為に、教皇になりすました双子座と戦い、見事、聖域を取り戻すことに成功したのだった。
だが、その身に受けた幾千をも超える傷に、黄道十二宮の戦いの後、青銅の少年４人は生死の境を彷徨うこととなる。
昏睡状態の彼等は、もし奇跡的に快方に向っても、全てが完璧に回復するには最低でも半年はかかる、そのような容体だったのだが・・・。
「今すぐ帰ってポセイドンに伝えとけよ。俺達は今すぐに乗り込んでいくとな」
「・・・フッ、残念だけど青銅の貴方達では神殿の入り口で全滅でしょうね。これはもうアテナの死は確実だわ・・・アッハハハ――!!」
高笑いを上げながら、美しい人魚は滝下へと飛び込み、姿を消した。
瞬がその素早い動きに驚きの声を漏らすが、やがて一同は静かに座す老人へと身を向ける。
童虎の弟子である紫龍が一番に口を開いた。
「・・・老師、お久しぶりです」
「紫龍、皆・・・聖域十二宮ではよく闘ってくれた・・・まだ絶対安静と聞いていたが・・・」
「沙織さんの小宇宙（コスモ）が突然はじけたのを感じたんです」

「それに、アルデバランも俺達を守って海闘士の一人にやられたと・・・」
「いつの間にか、事態は大きく動いていたのです」
「これ以上寝ていられなくってここまで来ました」
星矢が、紫龍が、氷河が、瞬が、口々に訳を話し出す。
童虎は少年達の言葉を、険しい表情で聞いていた。
「老師、俺達はポセイドンと闘います。・・・しかし聖衣は十二宮で破壊されてしまいました」
「――えへ、破壊された聖衣ってこのことかい？」
「貴鬼（きき）！　それは青銅聖衣の箱じゃないか！」
場にそぐわぬ軽快な声で現れた少年、貴鬼。
彼は、聖闘士達の鎧である聖衣を修復する技を持つ、牡牛座（アリエス）のムウの弟子である。
「黄金聖闘士達の血で蘇った新生聖衣（ニュークロス）！　さっきのお姉ちゃんの匂いを辿れば、ポセイドン神殿に着けるはずだよ・・・さあ、おいらについといで――ッ！」
青銅の鎧を運んできた少年は、女性が姿を消した滝下へと飛び込んだ。
「・・・老師、行きます！」
そして星矢達も、続々とその後を追い、新たな戦いへと身を投じていった。
再び世界は、激しい雨と滝の音に支配される。

「ま、また・・・すまぬ、皆・・・」

童虎は、声を震わして少年達を見送った。

復活が差し迫った、封印されし魔星を監視するため、彼は、五老峰から離れることができないのだ。

聖域にいる黄金聖闘士達も、青銅聖衣を修復するために致死量を超える血を流し、またいつ復活するか分からない冥王軍に備えて、身動きがとれない。

海に覆われつつある地上を守れる者は、その敵の数と比べれば、雀の涙ほどに少なかった。

溺れていた人を陸地へと避難させた俺は、再び海に入った。

あれから3日、いや4日は経ったのだろうか。

異常な大雨の影響で、海の近郊に居住していた人達が、住む場所を失いつつある。

ポセイドンの拠点を探すため海を爆進していたら、何百を超える人が海に流されてい

たのだ。
流石に目の前で溺れる人を見捨てる訳にもいかないので、姿を見られないようにして陸へと運んだ。
身体に宿る英雄の力は、当たり前のように扱えるようになった。
時間は掛かったが、希望は残っている。
ジュリアンはまだ、生きている。
なんと、海に満ちる海皇の魔力から、微かに彼の気配を感知したのだ。
「・・・！　今の魔力の動きは・・・地中海の方向か！」
強い闘志を燃やすような、複数の力の反応。
それが、何かを追うようにして生まれて、地中海の底で消えた。
力の消えた場所、そこがきっとポセイドンの拠点がある場所だ。
消えた気配。
なるほど、これでようやく合点がいった。
ポセイドンの拠点は結界を展開して、存在を探知できないようにしていたんだ。
・・・今の俺なら近くまでいけば、その違和感に気がつけるのだろうが、数日前の力の制御が出来ていない段階では、見落としてしまったのだろう。
よし、行こう。

最優先事項は、言わずもがな、ジュリアンの救出だ。
そして、それが無事に遂げられたら、海皇にこの雨を止めさせるんだ。
これ以上、人が海に囚われることのないように。

立ち塞がる者

地中海を目指し、海洋を超えていく。
『・・・ッ見つけた!』
後数十秒で接触可能な距離に、地中海の底に居を構える、海皇の神殿を発見した。
あぁやっと、やっと辿り着くことが出来た。
そこには、海の水を遮断する、不思議な空間が広がっていた。
空気があるのは有り難い。
正直、海を泳ぐのに飽きてきたところだ。
空間の中心にはギリシャ風の神殿が存在し、囲むようにして八つの道が伸びている。
八つ道の内、三本の道の先には白い柱がそびえ立っていた。
二本の小さい柱と、一本のどでかい柱。
『・・・よし』
俺は海中を進む勢いを殺さぬまま、海皇の拠点内に真っ直ぐ突っ込んだ。
目視できる場所に友人がいないかと目を動かす。
「あっ」

そして、着地地点を決めていないことに気が付いた。
ドオオオン!!
爆音を轟かせて、白い柱が粉々に砕け散る。
意図せず、小さな柱の内の一本に突撃して粉砕してしまった。
・・・ま、まあ、友達を誘拐した連中に気を遣う必要はないな。
うん、不可抗力なら仕方がない。
「・・・きっ、貴様ぁ！　よくも北大西洋の柱を！　何者だ!?」
神殿から続く道より、黄金の鎧を着た男が現れた。
ソロ家で会ったアイオリアさんの鎧よりも、少し濃いめの金色だ。
ヘッドマスクを被っているので、容貌は確認できないが、声からして成人した男性なのだろう。
「た、大切な柱なら、ちゃんと近くで守れよな」
「黙れ・・・！　何者なのかと聞いている！」
「・・・俺はエル。お前達の攫ったジュリアンの従者だ」
「なに?　エルだと」
怒りと疑いの混じった目で、男は俺を睨めつけた。
「・・・聞いていた話と随分と違うな。エルという従者は、唯の一般人のはず。天秤座の

武器もなしに北大西洋の柱を破壊した貴様と、同一人物であってたまるか」
「つい数日前に一般人を卒業することになったんだよ。・・・なあ、俺に戦う意志はない。ジュリアンがどこに居るか教えてくれ」
「フッ、何を甘いことを。我が守護柱を破壊した者を、この海龍（シードラゴン）が見逃す訳がないだろう？」
男は失笑を零し、尋常ならざる殺気を纏い始めた。
そして声高に叫ぶ。
「見るがいい、星々の砕け散る様を――――ギャラクシアンエクスプロージョン!!」
男が両腕を頭上で交差させた瞬間、
その両の手から、世界を破壊する力が生まれた。
銀河の星々をも砕く、圧倒的な力の奔流が俺の身を飲み込む。
「な――ッッ?!　ぐうううっ・・・!!」
咄嗟のことに対処が遅れる。
両手を突き出して耐えようとするが、凄まじい衝撃波に押し負け吹き飛ばされた。
崩れた柱に身体が打ちつけられ、瓦礫に押し潰される。
「ふふ、ははは！　多少はやるかと本気になってみれば、戦いを知らぬ、くちばしの黄色いヒヨコではないか！」

「・・・海龍(シードラゴン)様！」
「む、テティス、何の用だ」
「大西洋の柱が爆発するのが見えたので、何事かと駆け付けたのです――・・・!? ジュリアン様の従者のエル・・・!? な、なぜ貴方がここに!?」
「・・・そういうあんたは、誰なんだよ」
「ほう、我が最大の拳を受けて、立ち上がれるか、エルとやら」
傷を再生させ、俺は静かに起き上がり、参入者に目を向ける。
狼狽した声の正体は、桃色の鎧を纏う、裂傷に塗れた美しい女性だった。
自らの気持ちが良いほどのやられっぷりに、呆れて声も出ない。
エルキドゥの肉体でなければ、死んでたな。
・・・敵地で何を油断しているんだ、気を引き締めろ。
戦う意志がないなど、戦場(いくさば)において口にしていい言葉ではないだろう。
突然攻撃を仕掛けてきた男を睨み付けながら、俺は言葉を言い放つ。
「今の攻撃がお前の最大の技だと言うのなら、お前に俺は倒せない」
「なんだと?」
「この空間内でも、大地からの魔力は問題なく得られる。故に、一撃で俺を倒す火力もないのなら、無限に再生するこの身を破壊させることは不可能だ・・・――痛い目みたく

なきゃ、さっさと俺の質問に答えろよ金ぴか野郎」
「・・・強がるなよ、小僧。そんなに生き急ぎたいのなら、この私がこの世から消してくれる」
「い、いけません、海龍様！　この人はポセイドン様が探すように命ぜられた――！」
「問答無用！」
「!!」
海龍の手が、大きく三角形を描いた。
――世界が歪んでいく。
「愚かな従者よ、時の狭間に落ちるがいい！――――ゴールデントライアングル!!」
海龍が技名を口にすると同時に、異次元の扉が開かれた。
先程の技の折に幻視した星々に加え、朽ちた飛行船や海賊船といったものが異空間に浮かぶ。
一度入れば、常人は戻ることの叶わぬ異次元空間、時の狭間。
そんな絶望的な世界が、俺を飲み込んだ。
「魔の三角地帯――黄金の三角形（ゴールデントライアングル）。北大西洋にあるこの地域に入り込んだ者は、総てこの世から消滅する。如何に再生を繰り返す肉体を持とうとも、異次元においては無意味と知れ」

「そんな・・・！　海龍様、なぜこのようなことを!!」
「わからんのか、テティス。あのエルとかいう従者は不死の肉体を持っている。殺しても死なぬ厄介な存在だ、異次元に放り込むしかないだろう」
「し、しかし・・・」
「ふん、安心するがいい。異次元といっても、あの者は私の把握できる位相に送り込んだ。聖闘士共を片付け終えるまで、大人しくさせておくだけの話よ。・・・ん？　なんだ、この虚空から伸びる白銀の鎖、は・・・ッ!?」
地面に突き刺さる白銀の鎖を中心として、景色に亀裂が生まれる。
割れた手鏡の表面のように、歪な線が幾重にも走る。
ピキピキピキピキピキ――――パリンッッ!!
「なッ――!?」
現世と異次元との境界線を無理矢理こじ開けて、海底神殿に舞い戻る。
俺は、驚愕の表情を浮かべる男に突貫し、吠えた。
「喰らえよ海龍ッ!!　民の叡智（エイジオブバビロン）――――!!」
右拳で正拳突きを放ち、海龍を吹き飛ばす。
そして、地面から数十本の鎖を生み出し、宙を舞う男を拘束した。
殴られた拍子に、男のマスクが外れる。

「なっ、なんだこの鎖は!?　ぐうッ、解けん・・・!!」
緑がかかった青い長髪が男の肩に落ちた。
二十代かと思われる、負けん気の強い面が顕になる。
「神性を宿した鎧を着たのが、あんたの敗因だったな。・・・その鎖は、ティアマトって神様も拘束できるぐらい強力だ。異次元に逃げることも出来ない、お前の負けだ」
「馬鹿な・・・!　私がこんなぽっと出に敗れるなど・・・ッ!!」
「・・・あんたは何も話してはくれなさそうだな。・・・テティス、だったか?　頼む、ジュリアンがどこに居るのか教えてほしい。・・・あいつは、俺の大事な友達なんだ」
「・・・なりません。今の貴方をジュリアン様の元へ連れて行くわけには・・・」
「・・・そうかよ、まあ、侵入者に優しくしてくれる訳ないもんな・・・いいさ、ポセイドンに直接聞くことにする」
何やら俺を知っているような言い回しをしてはいるが、俺は侵入者で、彼女にとっては敵。
期待はしていなかったが、仕方が無いだろう。
無理矢理口を割らせる手も考えたが、それは自分の流儀に反するし、ジュリアンが知れば悲しみそうなので、止める。
拠点に侵入する瞬間、目に見える範囲にはジュリアンはいなかった。

だとすれば、唯一屋根があり中の様子が見えなかった、中央の神殿が最有力だろう。
そう考え、中央に伸びる道へ向おうとする。
しかし、傷だらけのテティスが俺の前に立ち塞がった。
「エル・・・ジュリアン様は、自らの意志でこの神殿に留まっているのです、連れ戻すことは貴方でもできません・・・どうか、ここで止まってください」
「・・・は？」
訴えかけるように放たれた言葉の中身に、思わず懐疑的な声を漏らす。
歩き出した足を止めてしまう。
真意を測ろうとテティスという女性に目を向けるが、敵意も、騙す気も全く感じられない。
彼女の真っ直ぐな瞳は、真実のみを映し出していた。
「・・・ッ・・・なんだよそれ・・・・いや、そんなの有り得ない、信じられない」
「く、くく・・・無知とは、これ程までに滑稽なのだな。ソロ家の従者よ、テティスは心からお前のことを想って言っているのだぞ？」
「・・・・・・・滑稽で結構、気遣いも不要だ」
誕生日のパーティの中、突如として姿を消した俺の友人。
あいつは、数年前は危なっかしいところも沢山あったが、今は皆に心配をかけないよ

うにと、当主で有りながらも気遣いを忘れない奴なんだぞ。
そんなジュリアンが、自らの意志でこの神殿に留まっている・・・。
「・・・それが事実であるのなら、その真意を尋ねなければならない」
「エル・・・」
何故、このテティスという名の女性が、俺を気遣うような態度をするのかは分からない。
しかし、ここまで来て立ち止まることなど出来るはずもなかった。
「――ならばこの場は、俺に引き継がせて貰おうか」
突如として、崩れた柱の直ぐ近くに、新たな人影が出現した。
「・・・こ、この小宇宙は！　不死鳥、フェニックスの一輝!!」
海龍が焦ったような声で名を叫んだ。
傷だらけの少年が、激しい焔を纏い現れる。
その様は、炎の中から蘇った不死鳥そのものだった。
「お前は、ゴールデントライアングルにかけられ、異次元に飛ばされたはず・・・！」
「女神の小宇宙（コスモ）が俺を導いてくれたのだ・・・エルとやら、この場はこのフェニックスに任せて、先へ急ぐがいい」
一瞬、この少年を一人残していいものかと悩んだが、一番危険な海龍も鎖に縛られ、無

力化されている。
女神という言葉からして、恐らくこの一輝という顔の老けた少年は、女神の聖闘士なのだろう。
戦う術を持つのなら、今は、その言葉に甘えさせて貰おう。
「・・・あぁ、感謝する、不死鳥の一輝」
俺は礼を述べて、魔力を込めた足で宙を蹴った。
道を通るよりも、空を走った方が早い。
「くっ、待て！　お前が行けば、ポセイドンを刺激することになる・・・！」
「フッ、叫ぶことしか出来ないとは、双子座の名が廃るな、カノンよ・・・さあ、お前には聞くことがある・・・――」
後ろで何やら海龍が喚いているが、一輝という少年に任せて、気にせず神殿を目指すことにした。
ん・・・？
なんだあの黄金の光輝は・・・。
神殿へ、一条の流星が閃光となって降り立った。
見覚えの有る・・・そうだ、アイオリアさんの鎧と同じ輝きだ。
聖闘士達も戦っているのだろう・・・俺も、急がなくては。

振り返ることなく空を行く俺は、
桃色の鎧を纏った女性が、酷く悲愴な表情で立ち尽くしていることには、気が付くことができなかった。

譲れない想い

風を切り、流れるようにして神殿内へと侵入する。
内部は凄まじい重圧に支配されており、この場は正しく（まさしく）、海皇の居する神域なのだと主張していた。
・・・いや、全く笑えないレベルの魔力濃度だ。
常人なら、過呼吸を起こして卒倒してもおかしくない。
ジュリアン、無事だよな・・・？
最奥からは、肌を刺す海皇の神気と、今にも消えそうな複数の人の気配しか感じられない。
一抹の不安を抱きながらも、友を探しながら進み続ける。
やがて、開け放たれた重厚な扉が現れた。
扉の奥に視線を移すと、地に伏せる三人の人影と、黄金の翼を広げ、弓矢を構える少年の背中があった。

・・・倒れているうちの一人は女性、残りの二人は成人もしていない少年だ。
言い様のない感情が生まれ、思わず唇を硬く引き結ぶ。
だが、今は彼等の先の存在に、意識を向けねばならない。

ソレは、総てを見下ろすように佇んでいた。
黄金色の鎧に身を包み、古代の力の象徴である三叉鉾（さんさそう）を握る、原初の統治者。
頭部を守る兜に隠れて面は見えないが、その正体は一目で分かった。

――――海皇ポセイドン

天に有りて裁定を下す――神と呼ばれるモノ。
片手一振りで天災を引き起す、世界の始まりと終わりに座する存在。
故に人はそれらを畏怖し、崇め讃える。
神に、滅ぼされることのないように。
あれが、海皇ポセイドン。
あれが、ジュリアンを攫い、大雨を降らせている、全ての元凶か。
沸々と、怒りとも呼べる感情が、心の底から蘇る。

あぁ、だめだ・・・今は冷静になれ。
さんざん海龍の攻撃を食らって学んだだろう。
油断した瞬間に、全てが決してしまうのだ。
怒りをぶつけるのは、今やるべき事ではない。
今為すべきは、ジュリアンの安全を確保することだ。
眉間に力を込め、海皇と聖闘士達を見据える。
すると、戦況に、動きが生じた。
「この矢が俺の心臓に突き刺さるか・・・ポセイドンの体を射貫くか――――勝負だ、ポセイドン！」
黄金の翼を広げた少年が、弓の弦を限界まで引き伸ばし、
金の矢を海皇へと射ったのだ。
少年の想いに答えるように、射出された矢は直線に突き進み、見事な光の軌跡を描く。
全身全霊をのせた一撃が、海皇ポセイドンを襲った。
・・・しかし、
鏃（やじり）の先端が触れようとした、その刹那。
――――神の瞳が、光を放った。
ピタリ、と。

黄金の矢は、虚空で動きを停止した。
まるでそうするのが、この世の掟であるかのように。
そして、キリキリと耳障りな音を立てて、金の矢は回転し、
――――その目標を、少年へと切り替えた。
意志を反転させられた矢は、自らの主人を射貫かんと空を裂き、

「・・・――って、させる訳ないだろッ！」
俺は、叫びながら戦いの場に乱入し、少年の心臓を狙う矢を叩き折った。
「ッ!?　サジタリアスの矢が真っ二つに・・・あ、あんたは!?」
「俺は、エル。友達がポセイドンに攫われたから、取り戻しに来た。・・・その、邪魔して悪いが・・・俺の身体が、浮気性の強い武器は駄目だぞって訴えててな。見過ごせなかった」
「そうか・・・いや、助かった。俺は天馬星座の星矢（ペガサス せいや）。感謝するぜ、エル！」
「・・・あぁ・・・・・・・やっぱり君も、聖闘士だったんだな」
少年の血に濡れた黒い髪。
その下に覗く相貌は、俺の前世の故郷である、日本人のそれだった。
中学生くらいの少年が、傷塗れになって、神と戦っている。

『――エルさん、ジュリアンは私と聖闘士が、女神の名にかけて取り戻します・・・――』

ソロ家での、沙織さんとの会話を思い出した。

大雨による海水面の上昇、海中の異常な魔力など、海皇は、人類に対する脅威だ。

だから、彼ら聖闘士は地上の平和を守るために、この場で戦っているのかもしれない。

・・・だけど、この少年達を苦しめ、血を流させた要因の一端は、俺にもある。

約束と言う名の重りを、彼等に背負わせてしまったのだから。

神に立ち向かう彼らの勇気、そして誰かを守ろうとする意志に、俺は心から感謝しなくてはならない。

「・・・ここからは、俺が君達を守る番だ」

今此処に、想いを体現する。

感謝の気持を、俺の行動でもって示そう。

大地との繋がりを強く、この星との交わりを深めていく。

身体の持つ機能を最大限に発揮するために、精神を統一し、高めていく。

相手が神であろうと、覚悟を貫き通せば、届かぬ道理はない。

絵空事などではなく、俺は知ってた。

――この英雄の器は、それだけの可能性を秘めているのだと。

天の鎖の力は、人類に対する破壊行為に反応して、その威力を激増するのだ。

故に、海皇が人に害なすというのなら、この身は神をも穿つ武器と化す。
ジュリアンも、聖闘士たちも、絶対に守り抜いてみせる。
胸に確固たる決意を抱き、俺は、拳を強く握りしめた。

そして、抗うべき神を直視するべく、視線を動かして、

「・・・・・・・・・・・・え？」
間抜けな声が、喉から漏れ出た。
身体が硬直し、その機能を停止する。
何故だろうか、脳が、写し取った景色を、処理できずにいる。
否、処理することを、拒絶している。

ソレは、見たことのあるカタチをしていた。
ソレは、肩の下まで伸ばした青い髪を靡かせ、
見たことのない色を湛えた双眼で、俺を視ていた。
なにが起ったのか、理解することができない。
だが、一つだけ覆せない事実がそこには存在した。
１０年間共に過ごしたからこそ、見間違えるはずがないと断言できてしまう。
そんな、変えようのない現実が、俺の前に立ち塞がっていた。
ジュリアン・ソロが、黄金の鎧を纏って、俺の目の前に直立している。

「・・・？」

おかしい。
そう、何もかもが有り得ないのだ。
何故なら、俺の目の前に居るのは、この神殿の主、ギリシア神話に登場する、海皇ポセイドンのはずなのだから。
だから、ポセイドンに攫われたジュリアンが、海皇ポセイドンのように振る舞うのは、

辻褄が合わない。
荒唐無稽な現実を否定し、別の可能性を探ろうと思考する。
しかし、眼前の存在は、幻術でも夢でも偽物でもなく、紛うことなくジュリアン・ソロでしかなかった。
盤石に固めたはずの足場が、ガラガラと音を立てて崩れていく感覚。
呆然と眺めることしか出来ない俺に、友人の貌をした神が語りかける。
「・・・・・・その力・・・まさか、海中の小宇宙（コスモ）を掻き乱していたのが、お前だったとはな、エル。・・・まあいい。海闘士を迎えに出したが、行方不明だと聞いてな。お前のことだから、私を探すために彼方此方（あちらこちら）を回っているのだろうと踏んでいたが・・フッ、探す手間が省けたぞ」
瞳に深い海の色を宿した男は、静かに微笑んだ。
その声、その話し方、その笑う表情、その全てを俺は知っている。
最早、否定することすら愚からしい。
「・・・・・・・・・本当に・・・じゅりあん、なのか・・・？」
辛うじて絞り出したかすり声に、ジュリアンは頷いた。
そして、まるで歌うかのように、口に弧を描いた彼は音を紡ぐ。
「お前が見つかったのなら、早々に地上を海で覆ってしまおうか」

「・・・は？」

「あぁ、言っていなかったな。・・・旧約聖書に記されているノアの箱舟は知っているだろう？　あれは、過去に私が行ったものなのだ。４０日４０夜雨を降らせ続け、大地を全て海で覆い、地上の邪悪な生き物をことごとく消し去る。そして、１５０日経ち水が引いた後は、私がこの海はおろか、大地さえも支配する。・・・我が神殿を支える柱、メインブレドウィナ内の水も直に満ち、女神（アテナ）を人柱として完成に至る・・・全てが、私のものとなるのだよ」

「・・・・・・ノアの箱舟？・・・女神（アテナ）を人柱にする・・・まさか、あの柱の中に、沙織さんがいるのか・・・？」

ジュリアンの背後、神殿を抜けた先に、海の天井を穿つ白い柱がそびえ立っていた。

結界内に侵入したときに見た、一番太くて大きな柱だ。

女神を、沙織さんを、人柱にする。

ジュリアンを海皇から取り戻すと約束をしてくれた、あの優しい少女を・・・・・殺す？

「は・・・はは、面白くない冗談だ。・・・ほら、ジュリアン。その似合わない鎧は脱いで、ソロ家に帰ろう。執事長が今までに見たことがないくらい狼狽してて さ、これ以上待たせたら寿命を縮めてしまうよ」

泣きたくなるのを必死に堪えて、俺は笑いながらそう促した。
しかし、友は静かに首を振る。
「海皇ポセイドンとして目覚めた今、この神殿こそが、私の帰る場所なのだよ、エル」
「・・・・・・・」
穏やかに、子供に道理を教える親のように、ジュリアンは答えた。

・・・・・・そっか、そうなのか。
一度理解してしまえば、今までの違和感全てが一つの真実へと集約した。
時稀に、ジュリアンから感じた、カリスマとも言うべき圧力。
ソロ家の直ぐ近くにある、ポセイドン神殿の跡地。
ジュリアンを探すときに海中から感じ取った、彼の気配。
ジュリアンは、俺の友人は、本当に海皇ポセイドンになってしまったんだ。
そして、酔狂でも冗談でも嘘でもなく、本気で地上を滅ぼそうとしているんだ。
あぁ、やっと分かった。
沙織さんや、テティスという海闘士が、俺を止めた理由。
こうなることが、目に見えていたのだろう。
だから、俺の心を守るために、何度も何度も忠告をしてくれたのだ。

ジュリアンを取り戻そうと神殿に訪れれば、ジュリアンに従い世界の滅びる様を眺めるか、それとも彼を止めるために戦うか。
そんな地獄のような選択をしなくてはならないと、彼女たちは察していたんだ。
――それなのに俺は、彼女たちの想いを、踏みにじってしまった。

「エル、何も憂いる必要はない。別に私は、全ての人間を滅ぼすつもりはないのだ。どうにもならぬ程に汚れきった地上を洗い流すことで、神話の時代のような、心清き人々だけの理想郷を創りあげる。ただ、それだけのことなのだ」
「・・・ただ、それだけのこと?」
「そうだ。お前も、世話になったソロ家の者達も、殺さない。私の統治する新たな地上で、幸せに日々を生きるのだ」
「・・・・・・・・・・・・・・」
ジュリアンは、夢を語る子供のように、蒼い目を輝かせた。
その瞳は、いつもの優しい色を失っている。
俺は、こんな目をしたジュリアンを、知らない。
「くッ・・・そんなこと、絶対にさせない！　沙織さんも、地上の平和も、守ってみせる・・・俺は、最後まで諦めないぞ!!」

「・・・そうだな、その前にまず、お前達聖闘士を片付けるとしよう」
低く呟いた海皇は、手に握る三又鉾――トライデントを、星矢へと向けた。
鉾の先端に蒼白い光が宿り、尋常ならざる力が圧搾していく。
嵐や津波、洪水や風を操る伝説の力が、
神に逆らう者の命を剥奪せんと、束ねられていく。
「サジタリアスよ、アイオロスの魂よ、俺に力を――！」
「――星矢ッ！　あれを真正面から受ければ塵も残らないぞ！」
「いけない！　避けるんだよ、星矢！」
星矢の後ろで倒れる、金髪の少年と、黒髪の女性が焦った表情で叫んだ。
しかし、星矢は避けることはできない。
立ち向かうことしか、彼には許されていなかった。
なぜなら、彼が避ければ、後ろにいる仲間が、海皇の一撃に飲まれてしまうのだから。
「神に逆らった己の愚かさを悔いて――消えろ」
極限まで高められた蒼白い魔力が、命を破壊する為に放たれる。
蜷局を巻き、螺旋となった一撃は、空気を軋ませて少年に肉薄する。
「星矢ッ!!」
「うおおおぉぉぉ!!」

星矢は、獣の如き咆吼をあげ、再び装填した矢を放つ。
天翔る流星のように、願いを込められた黄金の矢は――――海皇の放った暴力の渦に接触し、粉塵と化した。
天災が、人の命を否定し、その灯火を消そうと来襲する。

だからそれが、決定打になったのかもしれない。

「――――民の叡智（エイジオブバビロン）」

俺は、迷いを捨てた。
宝具を開帳し、地面から千を超える槍を生み出す。
ドッッッ!!!
と、鈍い音が炸裂し、力と力がぶつかり合う。
星矢の前に立ち、彼に殺到した災害を、撃槍を射出することで受けとめていく。
二つの力の余波は空気を軋ませ、唸り声を上げさせた。
暫くして、破壊の力が消えかけた頃、俺は口を開いた。
「星矢、行け」

「・・・エル？」
「先に行って、柱をぶっ壊して、どうか、沙織さんを助けてあげてほしい」
「だ、だが」
「安心しろ、海皇は俺が止める。先を行くお前達の背中を撃たせはしない」
海皇から目を逸らさずに、俺は宣言するように言葉を放った。
「・・・分かった。頼んだぞ、エル！」
景気の良い返事と共に、星矢は柱を目指して走り出した。
倒れ伏す聖闘士達も、膝を震わせながら立ち上がる。
眉をひそめた眼前の神は、心底分からないといった様子で俺を視た。
「・・・・・・・エル、何故、私の邪魔をする？」
横を通り過ぎようとした星矢達に、海皇は三つ叉の先端を向ける。
そして、再び神の力が圧縮され、彼等を襲わんと放たれた。
「・・・単純な話だ」
右手を前へと伸ばし、俺は掌から白銀の鎖を射出した。
先の尖った鎖は、神の力を貫き、霧散させる。
「海皇、俺はただ、許せないんだ」
「・・・なに？」

俺の気持に呼応するかのように、地面が蠢き、紫電が舞う。
「・・・海岸にうち捨てられた俺を救い、釣り糸に捕らわれた魚を助けるような・・・命を大切にしてきたジュリアンが！　俺を殺した神のように、平気で誰かの命を奪おうとしている！　そんな、今までのジュリアンを否定するようなことを、お前自身にやらせようとしている海皇が！　何よりも許せないんだ!!」
悔しいという気持を遙かに超えて、許すものかと叫びをあげた。
だって、そうだろう。
許容できる訳がない。
海皇ポセイドンの魂が、命を尊ぶ友人に浸食しているのを、この目で視てしまったのだから。
天馬星座の星矢を襲ったあの一撃。
あの瞬間、俺は、海皇ポセイドンの正体を知った。
ジュリアンの身体に宿る、二つの魂の光を垣間見たのだ。
空色の、優しい輝きに満ちた、穏やかな魂の光。
そしてその空色に浸食する、銀河の星々のような、眩い輝き。
前者がジュリアンの魂。
そして、後者が神たる海皇ポセイドンのものだった。

「・・・・・・なにを言うかと思えば、下らない」
ジュリアンは、俺の叫びを一蹴し、冷たい声を放つ。
「人の命とは、人の未来とは、神によって定められるもの。生殺与奪の権利は神の手にあり、その決定に抗うことは、許されない」
「違う・・・一年前に言っただろう。誰であろうとも、誰かの人生を決めつけて、縛りつける権利なんて持っていないんだ。それが例え、神であろうとも」
「・・・そうか、あくまでもお前は、私の邪魔をするのだな」
「あぁ、俺はお前を止めてみせるよ、ジュリアン」
「・・・・・・いいだろう」
海皇ポセイドン――ジュリアン・ソロは、諦めたように息を吐く。
そして、冷徹な表情で裁定を下した。
「我が使命の前に立ち塞がるというのなら・・・友であろうとも容赦はしない。エル、私の唯一人の理解者だった者よ。今よりお前を、私の敵とみなし――破壊する」
「!」
爆風が舞う。
圧倒的な魔力の波動が、海皇を中心として逆巻き世界を震わせた。
グバァッッ!!

海皇の頭上に、蒼白い波紋が拡がっていく。
全ての生命の始まりの地たる海の王。
海皇の名を冠する神が、脅威とみなした存在を打倒するべく力を開放する。
そして、海皇ポセイドンの魂の浸食も、早まっていく。
「ッ・・・ジュリアン!!」
友の魂の色が、消えていく。
優しい空色が、目の眩むような輝きに押し潰されていく。
「大地の力を操る者よ、土へと還るがいい」
頭上に拡がる波面は、結界内の侵入者全てを標的と定めた。
俺のみならず、メインブレドウィナの破壊に挑む聖闘士もろとも巻き込まんと、海皇の魔力が鳴動する。

「・・・・・・我が英雄よ、力をお借りする」
俺は虚空に呟き、彼方の人へと、胸に秘めていた想いを連ねた。
――エルキドゥ、俺の憧れの英雄。
前世で過ごした時の中で、俺は何度も貴方の輝かしい姿に目を奪われ、そして、勇気づけられてきた。

それなのに、自分がその身体に収まった途端、俺はその強大すぎる力の重さに怯え、蓋をし目を逸らした。
力とその責任から逃げてきた１０年間。
そして、必要に迫られて、力に縋った今の自分。
「・・・あぁ、俺は、卑怯者だ」
この身体には相応しくない存在だ。
――だけど、だとしても。
祈るように跪き、右手のひらを地面にあてる。
すると、足下から黄金の魔力が噴出した。
神の力に対抗するために、神によって創られた身体の力を呼び覚ます。
翳した手を始点として、光の粒子が渦を巻く。
黄金の竜巻は海皇の蒼白い波動を包み込むようにして、神殿内を照らしていく。
「我が威光を遮るか・・・！」
海皇は険しく表情を歪めて、三つ叉の鉾の穂先を俺に向けた。
全てを砕かんと神殿内に拡げていた力の流れを、一点へと切り替えていく。
ギリギリギリッッ!!
神の鉾に凝縮された莫大な魔力に、世界が悲鳴を上げた。

「・・・受けるがいい――！」
海の王、神の必殺の一撃が振るわれた。
地面を抉るだけに留まらず、その力の奔流は空間をも引き裂いていく。
海龍のゴールデントライアングルの際に飛ばされた異次元が、虚空から顔を覗かせた。
天地を切り分け、世界を生み出した、神の力が顕現する。

「・・・神業の槍（エルキドゥ）、俺に、一振の力を」
光を纏って、空高く跳躍する。
――大いなる大地（ガイア）の力よ。
儚くも、気高く輝き続ける、地上の灯火たちよ。
この筐、神造宝具の我が身に集まりて、神に叶う力と成れ。

「今呼び起こすは星の息吹。
君と共に歩もう、俺は・・・故に――
――人（エ・ヌ）よ、神（マ・）を繋ぎ止（エリ）めようッ（シュ）!!」

命を壊す神の力と、天地を繋ぐ人の力が衝突する。
世界からは音が消え、
やがて、極彩色の光が席巻した。

正義のカタチ

神々の武器、生きた宝具、ウルク最強の兵器。
それが天の鎖、エルキドゥという英雄の代名詞だ。
神代の粘土によって作られたその身体は、大地からの魔力供給がある限り、崩されることはない。
彼は他に類を見ないほどの、強大な再生、復元能力をもつ、不死身の存在なのだ。
しかし、彼にも逃れられない終わりがあった。
生死は表裏一体の存在なれば、この世に生まれ落ちた瞬間に、その最期も当然用意されている。
神の怒りに触れた彼は、死の呪いにより衰弱死した。
不死身といえども、殺せぬ道理はない。
『滅びの運命』そのものが、彼の最大の弱点なのだから。

「貴鬼、僕達も星矢のところに・・・！」
「ウン！　最後の柱も壊れたし、後はアテナを助けるだけだよ！」
アンドロメダ星座の瞬は、南大西洋の柱を守護する海将軍、セイレーンのソレントとの死闘に勝利し、最後の柱を天秤座の武器によって破壊した。
瞬と貴鬼は、傷だらけの身体を引きずって、中央の神殿へ侵入する。
異常な重力が身を襲い、何者かの小宇宙が風となって渦を巻く空間をなんとか走り抜けて、海皇の間へと辿り着いた。

そして、彼等は、２つの事象を目撃する。

１つは、容易に頭で認識できる、歓喜するべきもの。
天馬星座の星矢が聖闘士達の小宇宙を束ね、飛翔し、強固なメインブレドウィナの崩壊を成し遂げたというもの。

２つ目は、その喜びを打ち消すように発生した。
突如として、海皇と思わしき男の三叉鉾から放たれた、莫大な小宇宙の奔流。
蒼白い光をばらまく神の一撃は、蜷局を巻きながら世界を切り刻んでいく。
対するは、流星のように駆け抜ける、煌々しい星光の槍。
巨大な撃槍は世界を貫き繋ぎ止めようと、海皇の放つ奔流へと突き進む。

世界の始まりと終わりを眺めているようだった。
（・・・不味い）
その光景を間近で目撃している瞬は、理解する。
――あの２つが衝突すれば、全員、余波で死ぬ。
海闘士も聖闘士も関係なく、神殿内にいる者は死に絶える。
逃れる術も、防ぐ手段も、ない。
全てが、無へと還る。
「――ッ兄さん・・・一輝兄さん!!」
咄嗟に、大切な家族の名を叫んだ。
悔しさから溢れる熱い涙が、風圧で宙を舞い、光を反射する。
そして無情にも、その瞬間が訪れた。

２つの力の激突を起点として、爆風が生まれる。
世界は極彩色の光に包まれ、視覚は意味を失った。
次に、音が消えた。
聴覚から情報を得る術が無くなった。
瞬は涙をこぼしながらも、最期まで抗う。
貴鬼だけでも守り抜いてみせると、魂の小宇宙を燃やし続けた。
「・・・・・・・」
そろそろ、身体の感覚も消えてしまうのだろうか。
そんな思考が脳裏を過ぎった瞬間、世界が本来の色を取り戻した。
「・・・・・・・・え？」
「・・・しゅ、瞬！　オイラ達、生きてる・・・！」
視界が開け、音が蘇った。
呆然と瞬きを繰り返し、己の身体を確認するが、欠損している部位すらない。
「貴鬼・・・これは、一体・・・」
狐に化かされたかのような気持になりながら、瞬は力の衝突があった場所へと目を向ける。
そして、状況を把握できないまま、思い浮かんだ言葉を漏らした。

「・・・あれは、アンドロメダの鎖？　・・・いいや違う、僕の鎖ではない。では、あれは一体・・・？」

もしかしたら初めから、どうなるのかなんて、分かりきったことだったのかもしれない。

メインブレドウィナを破壊されたことにより、海皇の神殿は崩壊を始める。
海の水が結界内へと流れ込み、荒波が押し寄せる。
轟音の中で、神は眼前の男を睨み付ける。
「・・・貴様、何故――」
海皇ポセイドンの唸るような声が耳朶を打つ。
「――なぜ自ら避けなかった!!　なぜ私を貫かなかった!!!　答えろ、人間！」
「・・・・・・はっ」

心臓を貫く海皇の槍を忌々しげに眺めながら、俺は笑った。
笑うしかなかった。
「受けるしかないだろ、余波で周りの人間が死ぬのは御免だ。・・・貫けるわけがないだろう、その身体はあんたのものじゃない、ジュリアンのものなんだから」
「・・・・・・・」
「それに俺はちゃんと、目的を果たしたぞ、ポセイドン」
俺の肉体、足場、壁、柱、四方八方から、黄金の鎖が海皇ポセイドンへと伸び、その身体を拘束している。
いいや、厳密に言えば、海皇ポセイドンの魂を縛っている。
「・・・初めから、狙いは我が魂か」
「あぁそうだよ・・・ジュリアンの身体に宿る神の――あんたの魂さえ捕まえられれば、あとは引っこ抜くだけ。そうすりゃ身体の支配権も元に戻る、ジュリアンの魂の浸食も防げて俺の勝ち・・・――って、なるはずだったんだけどなあ」
大きく溜息を吐いて、俺は心臓を貫く穂先に目を移した。
そもそも、捨て身の特攻でもしなければ、この神様を拘束することはできなかった。
だから俺は海皇の一撃全てを一身に受けて、天の鎖でジュリアンの中の神の魂だけを取り出そうとした。

エルキドゥの肉体は不死身、物理攻撃では滅ぼせないもの。
だからポセイドンの鉾に貫かれても、めちゃくちゃ痛いで済むと、そう思っていたのに。
――俺の魂は、別だった。

鉾の穂先で、バチバチと音を鳴らして跳ねる蒼白い雷。
これは、計算外の存在だった。
「神鳴・・・雷かぁ・・・あぁ、それがあれば俺の魂まで簡単に届く・・・神の力ならば尚更だ。なにせ、俺の前世の死因が神の落雷だったわけだし・・・・・・畜生、神に滅ぼされるのが俺の運命なのか、嫌すぎるな」
薄く笑うと、頬を伝う液体に気がついた。
痛くて泣いているのか、悔しくて涙が出るのか、もう何も分からなかった。
「・・・不可解だ」
海皇は険しい表情を崩さないまま、静かに言う。
「何故わざわざこの依代の身体から、我が魂を取り出す必要があった？　鎖で縛りなどせず、そのまま貫けば、私を滅ぼすこともできただろう。何故、そのようにしなかったのだ」

「・・・あのさ、なんで俺があんたを殺さないといけないんだよ」
「何だと?」
「確かにあんたはジュリアンの身体を使って、人類を滅ぼそうと好き放題してくれた。だけど、敵だから、悪いことをしたから、気にくわないから殺すっていうのは、俺は違うと思うよ。少なくとも言葉が通じるのなら、殺し合うよりも先に話し合えばいい」
「・・・綺麗事を・・・そんな甘い考えでは大切なものを取りこぼす」
「・・・あぁ、そうだなその通りだ、現に今死にかけている・・・だけどさ、俺は綺麗事でも良いと思うんだ。綺麗だから憧れる。現実味がなくても魅力的で、ロマンがあるから追い求める。星に手を伸ばすのと一緒だよ。届かないと分かっていても、気が付けば腕が空に伸びて星を掴もうとしている。そういうもんなんだよ」
　瓦礫の崩れる音が木霊する。
　海水が俺達の足下まで浸食し、徐々に水位を上げていく。
　それでも俺は、目の前の神に向って、語り続けた。
　どうせ死ぬのなら、言いたいことを全部ぶつけてやる、そんな投げやりにも近い感情もあったのかもしれない。
「なあ、海皇。あんたから見たら地上は汚れていて、滅ぼすにたるものだったのかもしれない。だから過去に一度、ノアの箱舟とかいう大災害を起こして、全てをリセットし

た・・・だけどさ、一度人類を滅ぼして、その成果は芳しいものではなかった。つまり、ノアの箱舟は失敗だったんだろう？　だったら、失敗した方法を繰り返すのは、ナンセンスだ」

「貴様、私の邪魔をするに飽き足らず、我が使命を愚かと評するか」

「他にもやりようがあるだろって話だよ。いいかポセイドン、大切なのは、失敗したあとにどうするかなんだ。失敗から学んで次へと繋げる、それが成長なんだ」

「・・・・・・神に、成長をしろと？　馬鹿馬鹿しい・・・我ら神は人とは異なり、完璧な存在なのだぞ」

「なーにが完璧な存在だ！　くじ引きで地上と冥界と海とかの支配権を決めるようなガバガバ具合でよくそんなこと言えるな!!　完璧だったら神同士で争う必要も、こんな馬鹿みたいな騒動を起こすこともなかった・・・ジュリアンの肉体を借りなくたって勝手に顕現できただろう！」

　徐々に消えていく魂を奮い立たせて、俺は吠えた。

「地上の汚れた人間を滅ぼして、心の清い人間だけの理想郷を作る？　なんで地上の人間が汚れていると断言できるんだ！　どうして今一生懸命生きている人達が、無慈悲に殺されなくちゃいけないんだよ！」

「・・・人は”弱い”。故にその心は強者に靡き、容易に移ろう・・・ならば、神たる私

が統治する世界を作れば、清いまま、人間は保たれることとなる。そのためにはまずアテナが邪魔だ。そして、地上の人間達に、私の力を知らしめなければならなかった」
「その手段と過程で人間を殺すなよ。あんた一人の価値観で”汚れている”と分別されただけで、人の命が奪われる・・・そんなの許容できるかよ」
傲岸不遜で自由勝手な神には、どんな言葉なら届くのか。
そもそも神と人では、わかり合うことなどできないのか。
俺は神を繋ぎ止める鎖を必死に手繰り寄せて、言葉を絞り出す。
「・・なあポセイドン。確かに人間は弱いよ。ちっぽけな自分を守るために嘘をついて、誰かを傷つけ貶める、そんな存在だ。・・・だけどさ、弱いからこそ、弱い誰かの痛みを知ることが出来る。手と手を繋ぎ合うことができるんだ・・・それは、神ですら持たない、一種の”強さ”だと俺は思う」
「・・・神の持たぬ、強さだと」
「あぁそうだ、今だってあんたが弱いと謗った人間の手によって、神殿は崩壊しているだろう。・・・ポセイドン、地上を一掃する方法じゃ、あんたの望む理想郷はできなかった。だったら次はさ、滅ぼすんじゃなくて、人の心を変えていくことで、理想に近い世界を作っていくとか・・・そういうやり方じゃ駄目なのか？」
「・・・気の遠くなるようなことを言う。そんなもの、奇跡でも起きなければ到底不可能

だ」

「じゃあ何の問題も無いだろ・・・奇跡の力を操るのが神様なんだから。夢を叶えるのに時間を気にするなよ。現実味がないからって諦めるなよ。命を奪うしかないなんて幻想に囚われるなよ。神様だったらやってみせろよ」

「・・・・・・」

身体の感覚が薄らいでいく。

痛みすら消えて、だんだんと眠気が増してきた。

いつの間にか、海皇から感じていた憎悪は消え、観察するような視線が刺さる。

「・・・今日の誰かを犠牲にするやり方では、明日の誰も犠牲にしない世界なんて作れやしない。命を踏みにじらないと作れなかった理想郷なんて長持ちするわけがない。・・・そもそも本当に邪悪な人間なんていないんだ。正義を免罪符に、自分と考えの違う他人は間違った存在だと決めつけて、『あいつは悪い奴だ』ってレッテルを貼るから、邪悪な人間ができあがる。相手のことを理解する過程を放棄するから戦いは起きてしまうんだ」

緩慢に動く唇の端を、精一杯つり上げて言葉を紡ぐ。

きっと、今の俺の表情は、心底情けないものになっているのだろう。

「俺はあんたの夢を否定はしない。理想郷？　めちゃくちゃピュアで良い夢じゃん、応

援するよ・・・だからどうか、その過程を大切にしてほしい。・・・女神(アテナ)のように、人を守れなんて言わないよ。好きに選べばいいさ・・・だけど、命を奪う道しか歩めなかったのなら、今度は、人の命を守る方法を試したって、いいんじゃないか・・・神様？」

「・・・・・・・・・・」

沈黙で返す海皇に、思わず苦笑した。

気が付けば、景色が遠のいていく。

あぁ、２回目の人生は、１０年で打ち止めか。

やっと新しい世界に慣れて、大切なものが出来て、これからってところだったのに。

・・・まぁ、嘘つきの最期には相応しいものかもしれない。

「・・・ごめんな、ジュリアン・・・楽しかった・・・まだまだ生きていたかったけど、もう終わりらしい・・・。俺と、友達になってくれて・・・――ありがとう」

せめて、無事にこの神殿からジュリアン達が脱出できるように、最後の力を振り絞る。

俺は、身体を貫く鉾に体重を預けて、静かに目を閉じた。

海皇ポセイドンは、自らの握る鉾に貫かれた者を見つめた。
若葉のような髪が顔を隠し、四肢はだらりと動かない。
既に息はなく、直に身体を残して魂は消滅するのだろう。
「・・・死しても未だ、我が魂を離さぬか、人間」
拘束は緩むどころか、より強固で揺るぎないものへと変わっている。
鎖は、神を縛るに飽き足らず、自らの身体を起点として周囲の崩壊を防ぐように伸びていた。
哀れむような視線で男だったものを眺める。
依代として選んだ人間、ジュリアン・ソロの友人だった者。
神に叶う力を隠し、女神と海皇の戦いに介入したイレギュラー。
「不遜にも神に逆らい、愚かな理論を述べ連ねて意見をし・・・命を尊ぶのかと思いきや、自らは呆気なく散っていく・・・なんと非合理的で矛盾した思考回路をしているのだ、貴様は」
罵倒をするが、答えはない。
目の前の存在は死んでいる。
人が神に反逆すれば死は必然、そう評価するのが世の条理。

「・・・だが、貴様は、私を殺していれば、無惨に死ぬことはなかったはずだ」
海闘士や聖闘士等とはまた異なった、特殊な能力を搭載した、奇怪な人間。
神を殺せる力を持っているのにも関わらず、敵である神を殺さず、話し合いで解決しようとした異常者。
「・・・来てしまったのですね、エルさん・・・」
「・・・女神(アテナ)か」
女神の小宇宙を纏った少女――城戸沙織が、柱より蘇った。
最早動かなくなったエルに向かい、少女は涙を流す。
そして、友と友の戦いを止められなかったことを悔いるように、目を伏せた。
「エルさん、貴方の小宇宙は、柱の中でも確かに感じ取っていました・・・此度の健闘に感謝します。後のことは私に任せて、どうか安らかに・・・」
聖闘士達が見守る中、女神は海皇へと身を向ける。
「人間である彼等がこれ程までに闘ったのです。・・・ポセイドン、貴方の負けです」
「・・・・・・フ、神が人に敗れるなど、太陽が落ちるほどにありえん話だ」
「・・・認めぬつもりですか、ポセイドン」
海皇は嘲笑を浮かべ、鼻を鳴らした。
「残念だが、女神よ・・・私はここで終る気などさらさらない。私は使命を遂げねばなら

ん」
「っ魂を縛られ身動きの出来ない状態で、まだ戦いを続けるというのですか！」
「・・・そうだな、長い戦いになりそうだ」
ポセイドンは静かに呟き、手に握る三つ叉の鉾に小宇宙を込めた。
エルの心臓に食い込んだ穂先が、空色にきらきらと光を放つ。
優しい輝きが、消滅の淵にあった魂を包み込む。
「一体何を・・・」
「なに、試そうと思っただけだ」
「試す？」
「命を壊すのではなく、守ることによって理想を叶える・・・ふん、分を弁えない人間の言葉に乗るのは業腹だが、試す価値はあるとみた・・・お望み通り、神の奇跡とやらをみせてやる」
聖火の如き神々しい光は、エルの魂のみならず、海皇神殿全てを照らす。
「これは、魂の修復・・・しかし、肉体の再生とは訳が違うのですよ？　いくら神の貴方といえども・・・」
「私を誰だと思っているのだ、女神よ。生命の始まりの地である海の王が、人の魂一つ元に戻せんなどと、本気で思っているのか」

頬に一滴の汗を浮かべて、海皇は嗤った。
そして、宣言する。
「――これにて此度の聖戦は終結・・・生を尊ぶ者達よ、各々の居場所へと還るがいい」

星光の岬

広大に拡がる海に、ぷかりと独り、浮かんでいる。
身体は動かず、ぼんやりと高い空を眺めるばかり。
気が付けば、浮力は消えて、深い海へと沈んでいく。
天の蒼穹を映し出した水面は、いつかの日に見た友の瞳と同じ色をしていた。
――海に、溶けていく。
不思議と恐怖はなかった。
寧ろ、自らが自然へと還っていく感覚は、真綿に包まれるような温もりに溢れていた。
――もう、全て手放して、この優しい気配に身を委ねてしまおうか。
遠のく空に別れを告げた。
生の終わりを享受しよう。
死を、受け入れてしまおう。
そう結論をだし、瞼を閉じようとする。
すると、ふいに、呆れたような低い声が響いた。

『馬鹿者、なにを勝手に消滅しようとしているのだ・・・――自らの始まりを思い出せ。神によって滅ぼされるのがお前の運命（サガ）であったのならば、神の慈悲により蘇るのもまた、お前の獲得した性質だったはずだ』

カッと、身体が熱くなる。

輪郭を失い、中身が零れて空となった魂に、生命の息吹が注ぎ込まれる。

『・・・神に意見するなど、本来ならば傲慢を通り越して極刑を免れん事態だが・・・今回だけは特別に目を瞑ってやる。寛大な処置に感謝せよ』

威厳の篭もった声は、クツクツと嗤う。

そして、海に溶けつつあった俺を、勢いよく空へと向かい押し出し始める。

『――――さあ、さっさと目を覚ませ、人間（エル）。好き放題喚き散らしておきながら、自らは死滅し丸投げとは始末が悪い。人の身でありながら、我が理想を〝応援する〟などと宣ったのだ、最後まで責任はとってもらうぞ』

体が宙に浮く。

海から離れ、空へと落ちていく。

そして

―――――　世界は、流転した。

瞼の薄い皮膚越しに、眩しい光が覚醒を促す。
まだまだ微睡んでいたい欲求に駆られたが、なぜだか起きなければならない気がして、渋々と目を開く。
「・・・知らない天じょ・・・いや、めちゃくちゃ見知った天井だこれ」
１０年の時を過ごした部屋で、間抜けな呟きを零す。
頭が霞んで、思考が上手く定まってくれない。
寝起きは良い方だと自負していたのだが、どうやら今日は身体の調子が悪いらしい。
「おはようございます、エルさん」
「あっどうも、おはようござい・・・・・・・え？」
「そろそろ目覚めると虫の知らせが届きましたので、勝手ながらお部屋に上がらせて頂きました」

「・・・・・・・」

穏やかな笑みを浮かべる桃色髪の少女に、思考が停止する。

ぎぎぎ、と首を動かすと、黄金の輝きを放つ獅子の聖闘士と、淡い色のワンピースを身に纏う金髪の女性と目が合った。

「・・・沙織様に、アイオリアさんに・・・海闘士のテティス？　な、なんで俺の部屋に・・・――――ッ！」

眠気も吹っ飛んで、混乱する脳みそを必死に動かした瞬間、

色の濃い記憶が俺の脳内を駆け巡った。

ジュリアンの誘拐。

女神アテナと海皇ポセイドン、神々の元に集う闘士達。

エルキドゥの力の開放。

神となった友人との激突。

――生の終わり。

・・・そうだ、何故たった一瞬とはいえ忘れられたのだろう。

走馬燈のように蘇る記憶の奔流に、嫌な汗が額を伝った。

「思い出しましたか？」

「・・・ええ、全てを。・・・ですが、俺は死んだはずです。これでは辻褄が合いません」

「砕けた口調で構いませんよ。・・・確かに、貴方は海皇ポセイドンの鉾に貫かれて、死の淵に誘われました。ですが、海皇の――彼の手により、再び生を受けることとなったのです」

「・・・・・・は？　ポセイドンが、俺を・・・？」

沙織さんの言葉を上手く飲み込むことができず、呆然と呟く。

自らの手で殺した人間を、自らの手で蘇らせた・・・？

一体どうして、そんな選択をするに至ったんだ、あの神様は。

話についていけず困惑する俺に、少女はゆっくりと口を動かす。

「命を守るために、敵も味方も、神も人も関係なく闘った貴方の在り方が、海皇の心に響いたのでしょうね・・・彼は無理を承知で、エルさんの魂を修復し、命を落とした海闘士達の肉体をも再生したのです」

「っ・・・その、無理っていうのは？　ポセイドンは無事なのか？」

「ええ、今はジュリアンの身体の中で眠っています。肉体の再生のみであれば、そう難しいことでもないのですが・・・魂の修復となると、神の力で以てしても容易なことではないのです」

少し考える素振りを見せた少女は、そうですね、と話し始める。

「散り散りに破り裂かれた書庫の本全てを、元の状態へと戻すような・・・いえ、それ以

上に途方もない偉業を為さねばなりません。それを、膨大な小宇宙を削った直後に行い、成功させた・・・海皇は正しく、奇跡を起こしてみせたのです」

「・・・俺の命を守るために・・・・・・奇跡を――」

ポセイドン、と小さな声で神の名を口にする。

言葉にできない感情が込み上げてきて、思わず左胸の前で、強く拳を握った。

胸には鉾によって開けられた穴も、神鳴に焼かれた痕も、残っていない。

――器に宿る魂も、空色の輝きに守られるようにして、ここにある。

人の命を奪わないでほしいと叫んだ俺の言葉を、海皇は汲み取ってくれた。

神に逆らった人間である俺を、救ってくれた。

「――ありがとう、神様」

最大級の感謝の念をのせた言葉を、虚空に放つ。

海皇が眠りから覚めたら、直接礼を言おう。

そして、今度は魂を無理矢理引っ張り出そうとするんじゃなくて、言葉を交わそう。

どれだけ時間がかかってもいい、海皇とちゃんと話し合うんだ。

未来の課題を胸中にしまって、俺は一番の気がかりを尋ねることにした。

「沙織さん・・・ジュリアンは、無事なのか?」

彼女の説明のお陰で、ポセイドンの魂と共にあるということは把握できた。
だが、責任感が強く心配性なあの友人が、自らの意志でこの場に現れないなんてあり得ない。
俺の問いかけに、沙織さん達は険しい表情で目を見合わせた。
その様子に、俺の不安はますます増大していく。
まさか、口に出来ないほど状態が悪いのだろうか・・・そんな想像が脳裏を過ぎったタイミングで、テティスが一歩前に出た。
そして僅かな逡巡の後に、重い口を開く。
「・・・ジュリアン様は、今朝方、お倒れになりました」
「は、え?」
「12日間眠り続けるエルさんの側を離れず、徹夜続きで・・・周りの制止の声も届かず、とうとう無理が祟って体調を崩されたのです・・・今は寝室でお休みになられています」
「・・・・・・・・・・・・・」
「今はお昼ですので・・・暫くはそっとして差し上げた方がよろしいかと」
「・・・えっと、怪我とかは?」
「外傷は、ございません」
「・・・・・・なるほど・・・そっか、うん。よく分かった。ありがとう、テティス」

礼を述べ、俺は天を仰いだ。
ジュリアン、お前が無事で本当に良かったよ。
身体を張って頑張ったかいがあるってもんだ。
・・・だけど、今度は色々と物申さなきゃならんこともできたらしい。
安堵と気苦労の混ざった溜息を吐き出して、俺は緊張の糸を解いた。
ひとまず、峠は越えた。
怒濤の展開に精神的疲弊は凄まじいが、目的は無事に果たすことが出来たのだ。
ならば、一端はジュリアンが目を覚ますまで、彼の件は保留としよう。
俺は思考を切り替えようとして、そういえば、と口を開いた。
「どうしてテティスは、侵入者の俺に忠告をしてくれたんだ？」
「・・・それは」
「あぁ別に、言いたくなければそれでも大丈夫なんだけどさ、ずっと気になってたんだ」
「・・・いえ、言いたくないというよりも、信じて貰えないのかもしれないのですが・・・」
僅かに言い淀んだ彼女は、意を決したように俺を見た。
「エルさん、１０年程前に海岸へ打ち上げられた魚のことは、覚えておいでですか？」
「魚？　・・・あぁ、覚えてるよ。あんなに鮮やかなで綺麗な鱗、一度見たら忘れないよ。
でも、どうしてあんたがそのことを？」

「・・・私、なんです」
「は？」
「私が、その魚なのです。・・・釣り糸に絡まり、干からびる時を待つばかりだった私を見つけてくれたのが、エルさん、貴方なんです」
「・・・テティスは人間なんじゃ・・・？」
「偉大なるポセイドン様の力によって、人魚姫（マーメイド）の――人のカタチを得たのです・・・ですから、エルさんとジュリアン様は、私の命の恩人で・・・お二人の戦いは、どうしても避けたかったのです」
「・・・・・・そういうことだったのか」
にわかには信じられない返答内容に、時差が生じる。
彼女の不可解だった言動の理由は、理解できた。
だがポセイドン、あんたは駄目だ。
何も理解できる要素が見つからないぞ。
・・・いや、大雨や洪水、肉体や魂の再生ができるくらいだ。
気まぐれかその場のノリで魚を美女の人魚姫にしてしまったのだろうか。
「・・・海皇はあれか、お伽噺とか結構好きなタイプか・・・」
何だかちょっと親近感を感じつつも、時代の先を行く神の行いに、思わず頭を抱えた

くなった。
ポセイドン、あんたなら未来でも生き残れるよ。
多分ソシャゲで女体化されたりアニメで黒幕にされたり、苦しい道のりが待っているのだろうけど。
がんばれ、神様。
「そうだ・・・沙織さん、テティス。せっかく忠告してくれたのに、無碍にしてしまって申し訳ない・・・気遣ってくれて、本当にありがとう」
「禍(わざわい)を転じて福と為すともいいます・・・寧ろ、よく闘ってくれました」
「海龍様によって異次元に飛ばされてしまったときは肝が冷えましたが・・・最終的にジュリアン様も、エルさんも無事に帰ってこられたのです。賞賛こそすれど、口を尖らせる謂われはありませんよ」
二人は優しい微笑みを浮かべながらそう言った。
なんというか、いい人達すぎる。
もしかしたらテティスも女神なんじゃないのか？
好意に照れくさくなって、思わず目を泳がせる。
すると、少しの間を置いて、今まで静かに佇んでいたアイオリアさんが言葉を放った。
「聖闘士も海闘士も、誰一人として命を落とさなかった。死者を出さぬ聖戦など、歴史を

紐解いても一度として存在すまい。エル、君の勇気と選択に感謝する。療養中の星矢達に代わって礼を言わせて欲しい」

「・・・結果としてそうなったにすぎないよ。死者が出なかったのだってポセイドンが身体を張ってくれたお陰で、奇跡のような偶然が重ならなければ、今頃世界は海に覆われていたかもしれない」

「だが、その結果は、君がいなければ訪れなかったものだろう。君ではなく、私やミロが海皇神殿へ乗り込んでいれば、少なくとも海闘士は一人として生き残らなかったはずだ」

「・・・・・・・」

「フッ・・・なにも、一切合切、君の選択が正しかったと言っている訳ではない。だが、君が願い、手繰り寄せた未来は、敵も味方も関係なく、全ての者の命を尊重したものだった。相手が神であることを理由に信念を曲げず、誰かを切り捨てることなく、意地を貫き目的を果たした・・・・・そんな真っ直ぐな君の生き様が、私には輝いて見えた。ただ、それだけのことなのだ」

光を散りばめた瞳を向けて、アイオリアさんは穏やかに言う。

だけど俺は、その言葉を素直に受け取ることが出来なかった。

「俺には見合わない言葉だよ・・・海龍にも言われたけど、俺は”甘い”んだと思う。何

でもかんでも手を伸ばそうとして、最後には死んでしまったんだから」
命の奪い合いなんてしたことがなかった。
甘さ故に敵の攻撃を何度も食らい、命を落とした。
今だって、誰かを犠牲にする選択はしたくないと思う。
だけど、その結果として自分が死んでしまうのは、矛盾している。
命を大切にしろと主張するのなら、自分の命だってその対象にしなくちゃ説得力なんて皆無なんだから。
でも、だとしたら。
正しい選択とは、一体何なのだろうか。
「エルさん、戦いとは信念と信念のぶつかり合い・・・自らの正義を掲げる者同士の衝突なのです。ですから、きっと、”正しい”と呼べる様な道は、拳を握った者の数だけ存在するのだと思います」
沙織さんが言う。
正義の形は、人の数だけあるものなのだと。
「・・・だけど、結果的に死に至った俺の選択は、本当に正しいと胸を張れるようなものだったのだろうか・・・俺は、俺の正義が分からない・・・」
「その疑問を忘れずに、これからも”答え”とは何なのかと探し続けて、生きていけばい

い。思考を止め周囲の声を聞かず、自らが絶対だと力を振りかざすのではなく、どうすれば刃を交えた相手とでも分かり合えるのかと悩み、後悔のない道を辿れているのかと過去を振り返る・・・それは、答えを確立していない、君だからこそ出来ることだろう」
「答えを、探し続ける・・・」
「それにな、エルよ・・・君の”甘さ”は、神の心を動かし、多くの人間の命を救った”強さ”なんだ。決して間違いなどではない・・・誇りを持て」
「アイオリアさん・・・」
目元が熱くなるのを堪えて、黄金の聖闘士を見上げる。
迷い、惑う心を抱えて生きていくことは、悪いことではないのだと、戦士は言う。
どんな人生を歩めば、こんな真っ直ぐな言葉を口にできるのだろうか。
地上の平和を守るために、女神の元に集った戦士。
平和を守る・・・言葉にすれば簡単で、よく聞くフレーズだ。
だけど、彼ら聖闘士たちはそれを現実に実行している。
年齢も、性別も、生まれた土地も関係なく、途方もない戦いに身を投じている。
誰かがやらねばならないのだから、自分がやるのだと言って。
あぁ、だからなのか。
そんな、誰かを守るために、命を燃やし続ける戦士の言葉だからこそ、こんなにも強

く心に響くのだろうか。
　貰った言葉を噛み締めるようにして、想いを紡ぐ。
「・・・俺は、戦いとは無縁の人生を送ってきて、今は未だ、命を大切にしなくちゃいけないってことぐらいしか、真っ直ぐに言えることはない・・・だけど、きっと、これからも何度も選択を迫られる時が来る。だから、その時にまた死んでしまうことがないように、考え続けることにするよ――今度こそ、大切なものを守り抜くためにも」
　俺の甘さを強さといってくれた、貴方の言葉を信じて。
　そんな想いを込めて、言葉を連ねた。
　アイオリアさんは優しい微笑みを浮かべて、頷いた。
「また何か困り事があれば、いつでも聖域（サンクチュアリ）に来るがいい。星矢たち共々、歓迎しよう」
「ええ、いつでもいらしてください。・・・それでは、私達はそろそろお暇するといたしましょう」
「えっ、も、もう行くのか？」
　部屋を出て行く二人に向い、焦ったように声を掛ける。
　すると、振り返った沙織さんが困ったように眉尻を下げた。
「申し訳ありません・・・少々、相手をしなくてはならぬ者がいるのです。私も、もう少しゆっくりとお話をしたかったのですが・・・」

「あぁ・・・グラード財団のトップってだけでも忙しいのに、アテナともなれば予定も満載だよな・・・。引き留めて済まなかった」
俺は微笑する少女に謝りながらも、少し悩んだ後に、問いかけることにした。
「・・・最後に一ついいだろうか」
「なんでしょう?」
「――――俺の能力については、何も聞かなくていいのか」
言わずもがな、と思いつつも、何も聞かれなかったことが逆に不自然で、俺は言葉を放った。
沙織さんは一瞬きょとんとした表情を浮かべたが、やがて口元を綻ばせながら、凛と紡ぐ。
「ふふ・・・貴方が命を尊び、私達と同様に平和を願う――誰かの為に立ち上がる勇気を持った人であると分かったのです。・・・これ以上、何を尋ねましょうか」
教えてくださるのであれば、喜んで耳を傾けますけどね。
そんな言葉を最後に残して、女神の宿命を背負った少女は部屋を後にした。

日が傾き、世界は今、落陽に至る。
ギィ、と音を上げる扉を静かに閉じて、俺は暗い部屋へと足を踏み入れた。
「・・・ぅ・・・嫌だ・・・私を置いて、死なないでくれ・・・」
「・・・・・・・すぅ――」
魘される男の枕元に歩み寄り、俺は大きく息を吸い込む。
そして、前世で観たテレビ番組を思い浮かべながら、叫んだ。
「おはよおおおおございまあああす!!」
「――――ッ!?!?!?」
カンカンカンカンッ!!!
手に持った鍋とお玉を打ち付けて、追い打ちをかけるのも忘れない。
「な、ななな っ!?　何事だ!?」
「おはようございます」
「・・・え、える??」
「おはようございます、ジュリアン坊ちゃん」
「・・・エル、なのか?」

「おう、起きたかこのあんぽんたん」
「・・・・・・」
ポカーン、と間の抜けた表情で静止するジュリアンを余所に、俺は鍋とお玉を適当な棚に置くことにした。
締め切ったカーテンを開けると、部屋は燃えるような朱に包まれた。
「夢、ではないのだな・・・」
呆然と俺を見つめる顔色の悪い男は、やがて苦悶に満ちた表情で拳を握りしめた。
シーツに深い皺が寄る。
俺は、静かに呟いた。
「本当に、全てを、覚えているんだな」
「・・・あぁ・・・お前が怒るのも無理はない・・・」
「・・・・・・」
「っ・・・済まない・・・いや、許してくれとは言わん・・・お前が生きていてくれただけで、私は、私は・・・」
ジュリアンは眉間に深い皺を刻む。
そして、口元に大きな弧を描きながら、涙を流した。
俺は小さく息をついた。

「・・・お前、どうして俺が怒ってるか、分かってないだろ」
「っ・・・なにを言う！　私はお前を、エルを殺そうとしたのだぞ!?　それ以外にどんな理由があるというのだ！」
「ちっげーよ馬鹿！　それはジュリアンの意志でやったことじゃないだろ！」
荒い息で叫ぶジュリアンの言葉を、打ち消すようにして言い放つ。
困惑する男に目を合わせて、俺は低い声で問いかけた。
「１２日間も、徹夜続きでぶっ倒れたって？　何やってるんだよ、らしくもない」
「・・・お前を・・・死んだように眠り続けるお前を、放っておけるわけがないだろう・・・！」
「だからといっても限度があるだろ！　眠りこける人間の隣で『１２日間連続徹夜チャレンジ！』とか何の番組だよ速攻で企画倒れになるわ！　締め切り前の漫画家じゃないんだぞ!?　気持ちは嬉しいけど夜ぐらいは寝ろ！」
「・・・ぐ・・・」
「・・・せっかく、せっかく無事に帰ってこられたんだ・・・。頼むから、自分の身体を労ってくれよ。これ以上心配させないでくれよ、ジュリアン」
「エル・・・」
体調管理は当主の勤め。

昔から執事長が口酸っぱくなるまで言っていた言葉だ。
緊急時であるのなら多少の無理は仕方がないと思う。
だが、冷静さを失い、ぶっ倒れた挙げ句、周りに心配をかけるのは駄目だろう。
今回はただでさえ誘拐騒ぎが解決した後だったのだから。
「・・・・・・」
夕日が完全に沈みきり、窓からは星光が注ぎ始めた。
沈黙が満ちる。
澄み通った夜の空気が無性に恋しくなって、俺は窓を開いた。
そして、ベッドに腰掛けるジュリアンの前に移動して、
――俵のように、脇に抱えた。
「なっ、え、エル？」
「よし、窓から放り投げる」
「――はあ!?」
「・・・っていうのは冗談だ・・・――舌を噛むなよ、ジュリアン」
「っ！」
ジュリアンに負荷がかからないように魔力の膜を展開して、夜の帳へと繰り出した。
ひゅう、と冷たい風が頬を撫でる。

神秘の力を足裏に束ねて、満天の星空へと駆け上がっていく。
まるで、銀河の中に迷い込んでしまったかのような錯覚を覚えた。
「ソロ家があんなにも小さく・・・」
「ずっと前から、やってみたかったんだよな。・・・ギリシャの空は、星がよく見えて綺麗だったから」
前世の日本じゃ、田舎か町全体が停電になった時ぐらいしか、こんな星空は拝めなかった。
まだ21世紀に入っていないってのも大きいのかもしれないが、天気さえ良ければ毎日見ることの出来る星の海が、俺は心底好きだった。
・・・昔の人は凄いよな。
星を繋げて生み出した星座や、現代でも語り継がれる、神話なんてものを創造してしまうんだから。
今も昔も関係なく、この宝石のような夜空は人々の心を癒やし、惹きつけてきたのだろう。
「エルキドゥの力を封印し続けていたら、こんな体験もできなかったんだろうな」
「・・・エルキドゥ・・・確か、ギルガメシュ叙事詩に登場する、かの王の唯一無二である親友の名、だったか・・・――まさかエル、お前は・・・」

「俺はエルキドゥじゃないよ。・・・俺はジュリアンの友達の、エルだ」
空に立つ身体を降下させる。
ゆっくり、ゆっくりと高度を下げていく。
「・・・スニオン岬」
ジュリアンが着地地点に気が付き、呟いた。
テティスから聞いた。
この岬が、ジュリアンが海へと攫われた、全ての始まりの地であったということを。
静かに大地に足を着けて、ジュリアンを降ろす。
「いつだって、大切な話をするときは、自然とこの岬に足を運んでたよな」
「・・・そうだな・・・だが今は、苦い記憶の残る場所となってしまった・・・」
辛そうな表情を浮かべた友人に、良心が痛んだ。
だが、この地を彼にとって悲しい場所で終らせたりはしないのだと、小さな決意を抱く。
「なあ、ジュリアン・・・俺、けっこう嬉しかったんだぞ」
「嬉しかった？　喜べるようなことなど、何も・・・」
「・・・海皇の魂に飲み込まれて、人類を滅ぼすとか、怖い顔で恐ろしいことを口にしているのに・・・それでも俺の事はちゃんと友達として見てくれていたのが、本当に嬉し

かった」

「・・・・・・・」

例えそれが、迷いを生み出す原因であったとしても。

１０年という時間が紡いだ繋がりが、神となった友人の心の中に、当たり前のように存在したことが、嬉しくて仕方がなかった。

「ジュリアンの意識が残っていてくれたから、俺は前を向けた。海皇から友達を取り戻してやるんだぞって、諦めずに意地を貫き通せたんだ」

もしもあの時、ジュリアンが完全に、海皇に飲み込まれてしまっていたら。

取り戻そうとした友人が、既に消えてしまっていたとしたら。

俺はきっと、我を忘れて力を振りまき・・・取り返しのつかないことをしていたのではないか。

「・・・お前というやつは」

ジュリアンは唸るような声を出した。

「だからといって、自分に刃を向けた相手を、そう簡単に許そうとするな。・・・その甘さは毒となる・・・つけこまれるぞ」

「許すもなにも、俺に刃を向けたのはジュリアンじゃないだろ。・・・それに、大丈夫だ。俺は確かに甘いけど、足下をすくわれそうになったって、もう何も、怖くなんかないん

だ」
「・・・何故そう自信満々に言えるのだ、お前は」
「だってそうだろう？　優秀な当主様が、隣で目を光らせてくれてるんだから、俺は安心して構えていればいい」
「っ・・・・・・私をあてにするつもりか」
「頼りにしてるとも。・・・今回は俺、結構頑張っただろう？　だから今度は、ジュリアンが俺に力を貸してくれよ」
俺は、意地の悪い笑みを浮かべて言った。
泣き笑いにも似た、不細工な表情になった友人は、小さく肩を震わせながらも、諦めたかのように鼻を鳴らす。
「・・・仕方がない。不器用な従者だが、当主として・・・いいや、友として、その肩を支えよう」
「はは、めちゃくちゃ心強いな・・・恩に着るよ、ジュリアン」
尊大な言葉に思わず頬が緩む。
このまま笑いながら、話を弾ませていたい気持が生まれたが、俺はその欲求を断ち切った。
冷たい夜風を胸一杯に吸い込んで、背筋を伸ばす。

全身を引き締めて、俺は口を開いた。

「――すまなかった」

１０年間ため込んだものを吐き出すように、言葉を連ねる。

「俺は、記憶喪失なんかじゃなかった」

次の言葉を促すように、静かに佇む友人に向って、俺は喋り続ける。

「・・・俺は、ここは違う地球の日本に生まれた、別の世界の人間だったんだ。運悪く神の雷に当たって死んで・・・運命と大地を司る、ニンフルサグって女神様に命を拾われて、この世界に転生したんだ。・・・また死んでしまうのが恐ろしくて、この身体に宿った力の責任から目を逸らして・・・・・・俺はジュリアンに、嘘をついた」

自嘲するように顔を歪める。

情けない声が喉から漏れ出た。

「ごめん・・・友達って言ってくれる相手を、俺はずっと騙し続けていたんだ。・・・もしも、今回みたいな騒動でも起きなかったら、俺は今でもこのことを口にしなかったと思う・・・救いようがない、最低な裏切り者だ」

「・・・・・・」

ジュリアンは、何も言わない。

・・・まぁ、当然といえば、当然だよな。
幻滅したのだろう。
１０年間も、誑かされてきたのだから。
居たたまれなくなって、目を伏せた。
俺はどうして、こんなにも心の弱い人間なのだろう。
それに、友達を騙し続けてきた罪悪感を抱えてもなお、この縁を切りたくないと強く願う。
女々しいことこの上ない。
「・・・・・・他には？」
「・・・え？」
「他には、何か隠していることはないのか？」
「い、いや・・・もう、なにも・・・」
「・・・全く」
呆れた様子で、ジュリアンはため息を吐き出した。
思っていたのと違う反応に、俯いていた顔をあげる。
友人は、射ぬくような真剣な瞳で、歩み寄った。
「この、臆病者」

「っ・・・ごめん――」
「――今更そんな事を言われて、この私が怒るわけがないだろう」
「・・・え？」
「・・・いや、そうだな。友であるというのに、抱えた悩みを打ち明けて貰えなかったことは、酷く悔しく・・・悲しい」
「ジュリアン・・・」
「フッ・・・情けない顔をするな、お前はもう少し、自らに見合うだけの自信を持つべきだ。だが、そうだな・・・今は腹を割って話が出来たことを喜ぶとしよう・・・これで、私達は、”本当の友”になれたというわけだ」
　優しい空色の瞳を細めて、ジュリアンは微笑んだ。
「っ・・・ありがとう・・・俺みたいな卑怯者を、友達と言ってくれて、本当にありがとう」
　貰った言葉の温かさに答えたくて、背一杯の笑みを唇にのせる。
　胸中に沈殿していた不安が、一掃されていくようだ。
　これからは本当の意味で、孤独を恐れる必要はないんだ。
　もう、こそこそと隠し事をしなくて、いいんだ。
「・・・――私の身体を使い、世界を滅ぼそうとするだけに飽き足らず、エルの命に手を

掛けたことは到底許すことのできぬ悪逆非道な愚行だったが・・・こうした機会を得られたことだけは感謝しよう・・・海皇ポセイドンよ」

苛立ちを隠す素振りなど、曖(おくび)にも見せずに、ジュリアンは岬の先端へと腰を下ろした。

一度海へと連れて行かれた場所だろうに、よく座れるものだと感心する。

星間飛行をした影響だろうか。

俺も、倣うようにして隣へと座った。

「なぁ・・・これから、どうするつもりなんだ」

「どうするとは?」

「・・・ジュリアンの中で眠っているポセイドンとか、俺は詳しくは知らないけど、蘇って入院中の海闘士とか・・・聖戦は終わったけど、問題が山積みだ」

「あぁ、そのことか・・・安心しろ、やるべき事は既に決めたのだ・・・――私は、ソロ家と海闘士たちの力を結集し、地上を平和な人の世へと導く」

強い光を灯した眼で、ジュリアンは空を仰いだ。

「海皇の理想とやらに手を貸す気はないのだが・・・私は、私自身の意志で、地上の平和を守りたいと思ったのだ。・・・謂われ無き暴力に晒される者。理不尽な悪徳に抗う術を持たぬ者。そんな声なき声のため、これからは生きていきたいと切に願う。・・・多くの人を傷つけ、命を冒涜した、罪滅ぼしの気持もあるのだがな」

「・・・だからそれは、ジュリアンが背負うものなんかじゃ――」
「いいや・・・確実に言えるとも。海皇の魂に浸食されていたとはいえ、あの瞬間の私は、世界を滅ぼすことこそが、自らの使命なのだと本気で思っていた。ならば、背負わなければ・・・私は、私でいられなくなる」
「・・・だったら、俺も一緒に背負うよ。従者としても、友達としても、俺はジュリアンに協力したい」
「・・・・・・」
　友人は口を閉ざし、苦しそうな表情で瞼を閉じた。
　目の下の隈が、月光りに照らされて、痛々しさを主張する。
「・・・なぁ、エルよ。お前は自由になるべきだ」
「自由・・・？」
「１０年前、私が父に口添えしたことにより、お前はソロ家に縛られることになった。・・・だが、もうそれも終いだ。・・・死んだように眠るお前を見て、理解した。友が元気に生きていてくれるだけで、私は幸せ者だったのだと」
　陰りのある微笑みで、ジュリアンは語った。
　まるでそれが、俺にとっての最適解であると断言するように。
「元は日本人だったというではないか・・・そうだ、確か日本に別荘があったな。そこで

暮らしてみてはどうだ？　生まれた国が恋しいだろうに、私は本当に気の回らぬ――」
「あの、それは、遠回しな解雇通知ということでよろしいですか・・・??」
「んん？　いや、そういう意味ではなく・・・」
「頼む」
「・・・は?」
「・・・・・・お願いします、クビにしないでください。・・・仕事は楽しいし景色は綺麗だしここで解雇されると次の職場に求めるハードルが高くなりすぎて就職先が見つかる気がしない」
「・・・・・・このまま、ソロ家の従者として一生を終えることになっても、構わないと言うのか?」
「構わないどころか大歓迎・・・というよりも、前提からしてずれてるんだ」
　どうしてそんな思考に陥ったのかと疑問に思いつつ、指摘する。
「これは、俺が自分の意志で選んだ道なんだぞ。やりたいようにやってきたから、俺はここにいる」
「・・・私を庇って言っているのか?」
「全く。というか、どうしてそんな勘違いに至ったのかを知りたいぐらいだ」
「・・・・・・・・・」

虚ろな目で、ジュリアンは右手を額にあてた。
「はっ・・・沙織さんの言ったとおり、早々に話せば片づく問題だったという訳か・・・」
眉をピクピクと震わせ、口端をつり上げながらジュリアンはぶつくさと呟いている。
その顔を見たら、容姿端麗の言葉が悲鳴を上げて逃げ出しそうだ。
俺はけらけらと笑った。
「じゃあ、良いよな？　海闘士がジュリアンに手を貸すんだ。古参の俺だって協力させてくれよ」
「・・・道のりは、険しいぞ」
「楽勝。きつかったら俺が抱えて飛んでやる」
「ふ・・・お前ほど心強い味方はいないな・・・――これからも、よろしく頼む、エル」
「任せろ！　ついでにエルキドゥの素晴らしさも存分に知って貰うからな、覚悟しろよジュリアン」
ゆっくりと立ち上がり、俺は友人に手を差し出した。
「あぁ、そうだ。すっかりタイミングを逃してたな」
「・・・？　なんだ、また何かしでかしたのか？」
「いつもやらかしてるみたいに言うの止めような？」
失礼な発言に、思わず突っ込みを入れた。

俺ほど安定した人間はいないというのに、何て酷いことを言うのだろう。

呆れながらも、手を掴んだ友人が、再び海へと落ちてしまわないように、慎重に引き上げていく。

広大な海を背に立つジュリアンに向って、俺は満面の笑みで言葉を紡いだ。

「――16歳の誕生日おめでとう、ジュリアン。君の未来が、幸せに満ちたものでありますように」

神に祈るようにして、俺は、友達の幸福を願った。